

2024 年度 調査報告書

地域の障害者スポーツ振興における 施設ネットワーク実践研究



笹川スポーツ財団
SASAKAWA SPORTS FOUNDATION

〔共同研究者〕

公益社団法人東京都障害者スポーツ協会
社会福祉法人 北九州市福祉事業団

目次

はじめに

I. 研究概要 ······	2
1. 研究目的	2
2. 用語の定義	2
II. 先行研究(地域における障害者スポーツ施設運営に関する研究:2023年度) ······	4
1. 調査概要	4
2. 主な調査結果	5
(1) 東京都内のサテライト施設、地域のその他社会資源の潜在的ニーズ調査	
(2) 北九州市内のサテライト施設、地域のその他社会資源の潜在的ニーズ調査	
(3) 障害者専用スポーツ施設のあり方	
～障害者のスポーツ推進の中核拠点としての役割を果たすために～	
(4) 障害者専用スポーツ施設における専門職のあり方	
～障害者のスポーツとの出会いや活動の充実に寄り添えるキーマンとしての期待～	
(5) 施設トランジション(移行)の事例ヒアリング	
3. 先行研究における提言	16
(1) ハブ施設、サテライト施設、および地域のその他社会資源に求められる取り組み	
(2) 施設ネットワークに期待される効果	
(3) 施設ネットワークの実現に向けて	
III. 実践研究(地域の障害者スポーツ振興における施設ネットワーク実践研究:2024年度) ······	24
1. 江戸川区の障害者スポーツ振興における施設ネットワーク実践研究	24
(1) 施設ネットワーク検討会議の開催(2023年度)	
(2) 江戸川区モデルプログラム作成(2023年度)	
(3) 江戸川区モデルプログラム概要(2024年度)	
(4) 江戸川区モデルプログラム詳細(2024年度)	
(5) 江戸川区総合体育館プールにおける参加者フィードバック後の対応	
(6) 江戸川区モデルプログラムまとめ	
(7) 江戸川区モデルプログラム座談会まとめ	
2. 北九州市の障害者スポーツ振興における施設ネットワーク実践研究	59
(1) 北九州市モデルプログラム概要(2024年度)	
(2) 北九州市モデルプログラム詳細(2024年度)	
(3) 北九州市モデルプログラムまとめ	
(4) 北九州市モデルプログラム座談会まとめ	
IV. 本研究のまとめと考察 ······	81
(1) 重度障害者の特徴とスポーツ実施における留意点	
(2) 江戸川区モデルプログラムで明らかになったこと	

(3) 北九州市モデルプログラムで明らかになったこと	
(4) 連携プロセスの検証	
(5) 信頼関係の構築	
(6) 施設ネットワーク化の全国展開に向けたサテライト施設の役割分担	
(7) インフォーマルサポートのフォーマル化	
V. 実施体制	90
参考文献	92

注)「しうがい」の用語は、「障がい」「障害」「障碍」などがあるが、本報告書では、固有名詞以外は、法律上の「障害」を使用した。

はじめに

本報告書は、笹川スポーツ財団が 2022～2024 年度までに実施してきた実践研究の成果をとりまとめたものである。本研究では、地域の障害者スポーツの拠点となる障害者スポーツセンターの役割、および整備が望ましい機能について明らかにしたうえで、障害者スポーツセンター以外の障害者優先スポーツ施設や一般的な公共スポーツ、地域のその他社会資源の役割と整備についても検討し、各施設のあり方についてまとめた。

本報告書の構成と概要は以下のとおりである。

I. 研究概要

本研究の目的、および用語の定義を示した。

II. 先行研究（地域における障害者スポーツ施設運営に関する研究）

2022 年度に、東京都障害者スポーツ協会との共同研究で実施した東京都内の公共スポーツ施設や地域の社会資源を対象にした潜在的ニーズ調査の結果を示している。さらに、東京都障害者スポーツ協会が指定管理者として管理運営している東京都障害者総合スポーツセンター・東京都多摩障害者スポーツセンターの職員とともに、障害者専用スポーツ施設のあり方や障害者専用スポーツ施設における専門職のあり方について検討した結果をまとめている。施設利用者である障害当事者にヒアリング調査を実施し、障害者の施設トランジション（移行）についてもまとめている。また、2023 年度に北九州市障害者スポーツセンターとの共同研究で実施した北九州市内の公共スポーツ施設や地域の社会資源を対象にした潜在的ニーズ調査の結果を示している。

2 つの共同研究の結果をもとに、障害者が身近な地域でスポーツに親しめる社会の実現に向けて、「障害者のためのスポーツ施設ネットワーク」（施設ネットワーク）の重要性を示した。

III. 実践研究（地域の障害者スポーツ振興における施設ネットワーク実践研究）

2023 年度に政策提言として公表した施設ネットワークの実現に向けて、2024 年度に実施した江戸川区と北九州市の実践研究の結果を示した。

IV. 本研究のまとめと考察

2022～2024 年度に実施した研究結果を分析し、改めて政策提言をまとめた。

VI. 実施体制

江戸川区の実践研究の実施体制、および北九州市の実践研究の実施体制を示した。

I. 研究概要

1. 研究目的

本研究は、地域の障害者が身近な地域で運動・スポーツに親しめる環境を整備するための効果的な施策や取り組みを検討する。そのために、地域の障害者スポーツの拠点となる障害者スポーツセンターの役割と整備がのぞましい機能、および障害者スポーツセンター以外の障害者優先スポーツ施設や一般の公共スポーツ施設、地域のその他社会資源の役割と整備がのぞましい機能を明らかにし、地域における障害者スポーツセンターを含めた関連施設のあり方を提言することを目的に実施した。

2. 用語の定義

本研究における障害者が利用するスポーツ施設に関する用語を以下の通り定義した(図表 1-1)。

① 障害者専用・優先スポーツ施設

笹川スポーツ財団(以下、SSF)「障害者専用・優先スポーツ施設に関する研究 2021」で明らかにした 150 施設が該当する。

② 障害者スポーツセンター

障害者専用・優先スポーツ施設のうち、(公財)日本パラスポーツ協会「パラスポーツセンター協議会」加盟の 26 施設(2023 年度時点)が該当する。パラスポーツセンター協議会は、施設の運営における諸問題等に関する意見交換や交流の場として 1984 年に「身体障害者スポーツセンター協議会(現・パラスポーツセンター協議会)」として発足した。

③ 障害者専用スポーツ施設

障害者スポーツセンターのうち、障害者のみが利用可能な施設。全国では、東京都障害者総合スポーツセンター、東京都多摩障害者スポーツセンター、名古屋市障害者スポーツセンター、大阪市長居障がい者スポーツセンター、大阪市舞洲障がい者スポーツセンターの 5 施設が該当する。

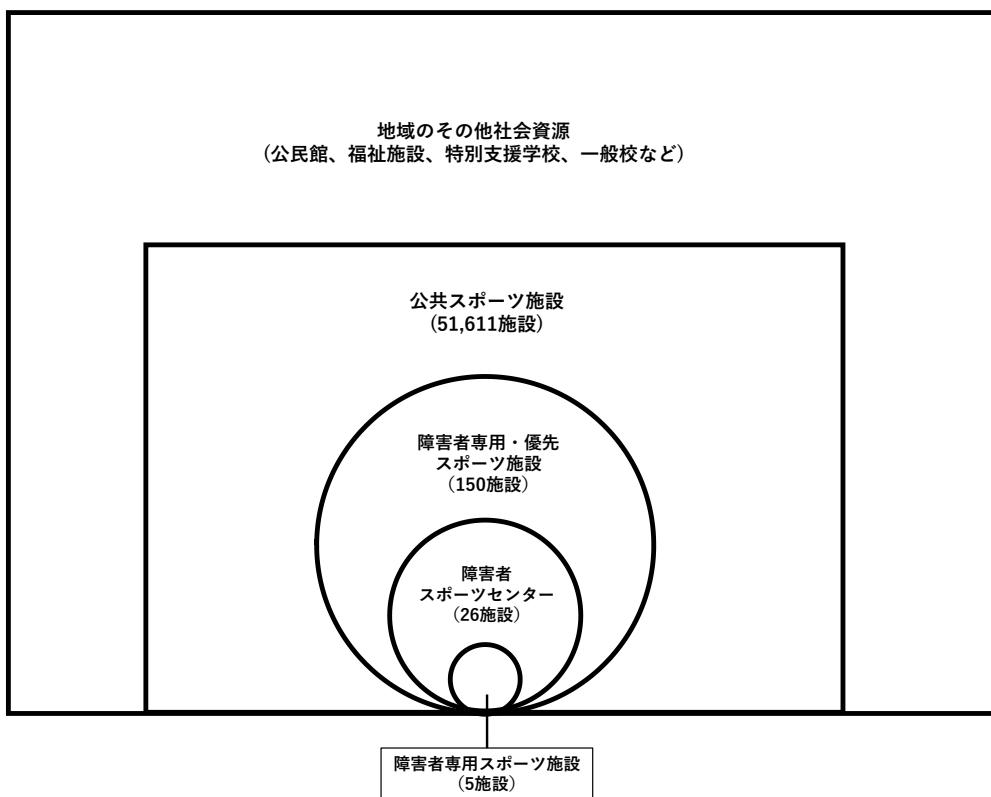
④ 公共スポーツ施設

「公立社会教育施設等に付帯するスポーツ施設」(4,630 施設)と「社会体育施設」(4 万 6,981 施設)をあわせた 5 万 1,611 施設が該当する。

⑤ 地域のその他社会資源

スポーツ以外の目的で使用されている公民館や福祉施設、特別支援学校や一般校などの地域の社会資源が該当する(①～④を除く)。

図表 1-1 障害者が利用できる地域の社会資源の概要



II. 先行研究(地域における障害者スポーツ施設運営に関する研究:2023年度)

1. 調査概要

SSF「障害者専用・優先スポーツ施設に関する研究 2021」では、地域の障害児・者のスポーツ環境の整備において、障害者専用・優先スポーツ施設をはじめとした地域のスポーツ施設のネットワーク化の必要性を政策提言した(図表 2-1)。提言では、地域とのかかわりのなかで既存の社会資源を活用して、日常的にスポーツに取り組める環境づくりが重要であると考え、地域の施設をハブ施設、サテライト施設、既存の社会資源の 3 タイプに分類し、ネットワーク構築を提案している。3 タイプの定義は以下の通りである。

① ハブ施設

障害の程度が軽度から重度まで、スポーツの競技性や志向に至るまで、多種多様なニーズに対応できる専門家を有している障害者スポーツセンターをハブ施設と定義する。

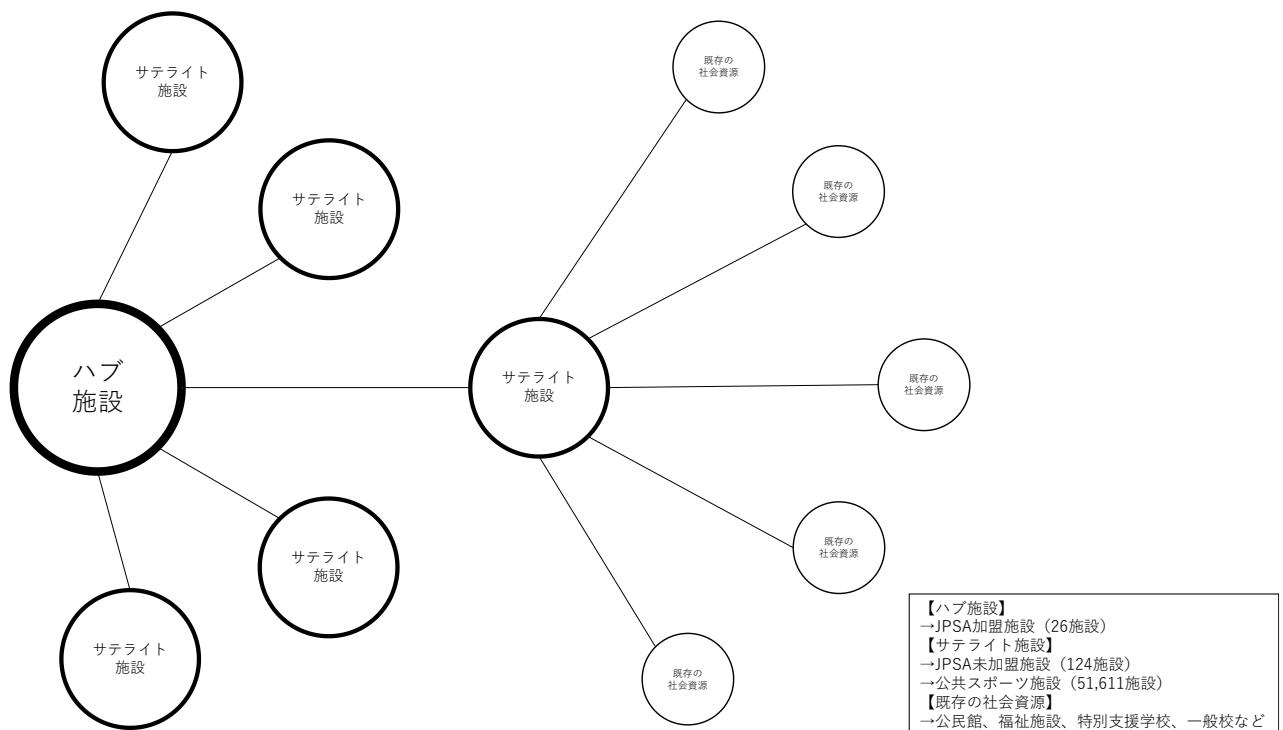
② サテライト施設

障害者専用・優先スポーツ施設 150 施設のうち、①のハブ施設を除いた 124 施設と、スポーツ庁「体育スポーツ施設現況調査」(2019 年)において、公共スポーツ施設とされる「公立社会教育施設等に付帯するスポーツ施設」(4,630 施設)と「社会体育施設」(4 万 6,981 施設)をあわせた 5 万 1,611 施設をサテライト施設と定義する。

③ 既存の社会資源

ハブ施設、サテライト施設以外で、すでにスポーツ以外の目的で使用されている公民館や福祉施設、特別支援学校や一般校などを既存の社会資源と定義する(本研究では、社会資源をより広義に捉えるため「地域のその他社会資源」と定義する)。

図表 2-1 ハブ施設、サテライト施設、既存の社会資源と地域との関係



SSF「障害者専用・優先スポーツ施設に関する研究 2021」(2022)

2. 主な調査結果

(1) 東京都内のサテライト施設、地域のその他社会資源の潜在的ニーズ調査

① 対象施設の抽出

地域の施設ネットワーク化に向けたモデルとして、東京都内の東京都障害者総合スポーツセンター（以下、総合 SC）と東京都多摩障害者スポーツセンター（以下、多摩 SC）をそれぞれハブ施設と定義し、その周辺の 10 自治体の施設を対象に、サテライト施設、地域のその他社会資源の対象自治体として施設を抽出した（図表 2-2）。

● ハブ施設

- ・ 東京都障害者総合スポーツセンター
- ・ 東京都多摩障害者スポーツセンター

※いずれの施設も日本パラスポーツ協会公認パラスポーツセンター協議会加盟施設である。

● サテライト施設

総合 SC、多摩 SC の各施設において、利用者が多い基礎自治体の上位 10 自治体内の公共スポーツ施設（145 施設）をサテライト施設とした。

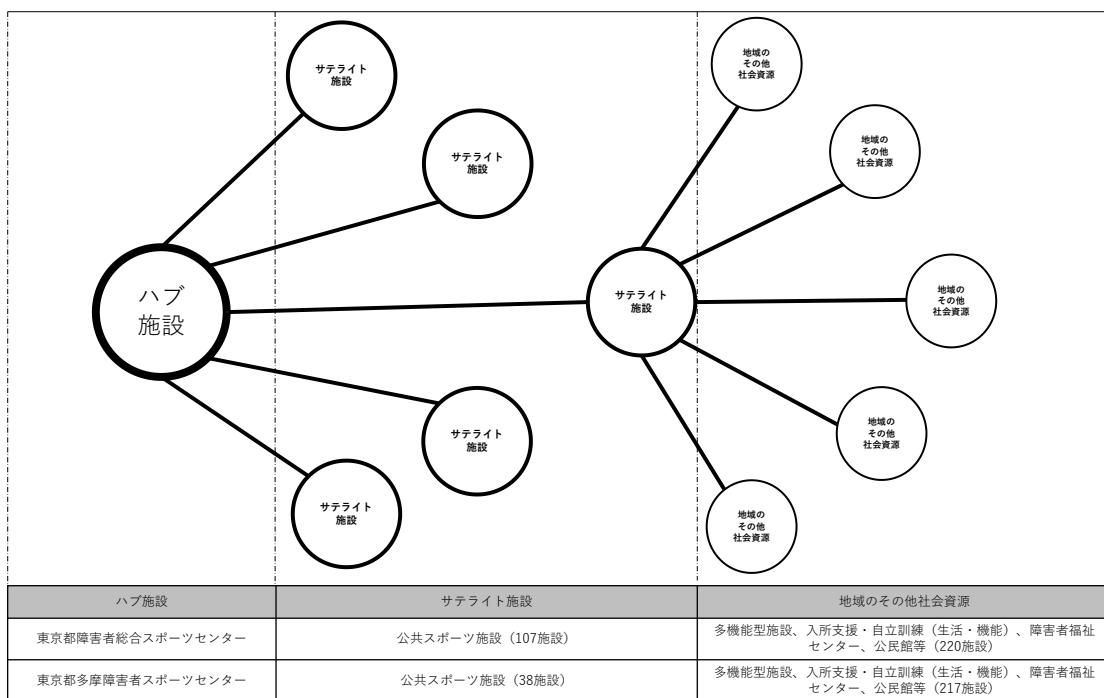
- ・ 総合 SC の該当自治体（北区、板橋区、足立区、練馬区、豊島区、荒川区、文京区、江東区、江戸川区、新宿区）内の公共スポーツ施設は 107 施設であった。
- ・ 多摩 SC の該当自治体（国立市、府中市、国分寺市、立川市、八王子市、日野市、小金井市、小平市、武蔵野市、調布市）内の公共スポーツ施設は 38 施設であった。

● 地域のその他社会資源

前述の該当自治体内の多機能型施設（212 施設）、入所支援・自立訓練（生活・機能）（105 施設）、障害者福祉センター（23 施設）、公民館等（97 施設）のあわせて 437 施設を地域のその他社会資源と定義した。

- ・ 総合 SC の該当自治体内の地域のその他社会資源は 220 施設であった。
- ・ 多摩 SC の該当自治体内の地域のその他社会資源は 217 施設であった。

図表 2-2 東京都内のハブ施設・サテライト施設・地域のその他社会資源のネットワーク図



②調査項目

- 施設の設置、および管理状況
- 施設の付帯施設の設置状況
- 施設の利用者の状況
- 施設の指導者
- 施設の実施事業
- 施設の実施種目
- 利用にあたっての工夫・配慮
- 総合 SC、多摩 SC の認知度
- 連携協働状況

③調査期間

2022年11月～12月

④調査方法

郵送法*

(*注) 対象施設が希望した場合は、調査票データをメールで送付し、回答済み調査票をメール添付で返送いただいた。

⑤回収状況

回収率は30.4%（177施設）で、サテライト施設が49.0%（71施設）、地域のその他社会資源が24.3%（106施設）だった。総合SCをハブ施設とした場合のサテライト施設の回収率は48.6%、地域のその他社会資源の回収率は25.9%、多摩SCをハブ施設とした場合のサテライト施設の回収率は50.0%、地域のその他社会資源は22.6%だった。

⑥調査の実施体制

本研究は、東京都障害者スポーツ協会と笹川スポーツ財団が共同で実施した。

⑦主な調査結果

- ・ **行政の所管部署**: スポーツ関連部署、障害者福祉／社会福祉関連部署、公園緑地関連部署、社会教育関連部署、地域振興部署など多様。
- ・ **施設（ハード面）**: サテライト施設では、約 4 割の施設が、「トレーニング室」「体育館・体育室」「プール」「グラウンド」「テニスコート」のいずれかを設置、地域のその他社会資源には、運動・スポーツ関連の付帯施設はほとんどなく、「体育館・体育室」が約 1 割。
- ・ **施設（ソフト面）**: 日本パラスポーツ協会公認「初級パラスポーツ指導員」の資格保有者がいる施設は、サテライト施設、地域のその他社会資源あわせて 16.3% (8 割以上の施設で障害者スポーツ指導に関する有資格者が不在)。
- ・ **障害者の利用状況**: サテライト施設において「障害者の利用があり、利用者数を把握している」のは約 2 割、地域のその他社会資源では約 6 割。
- ・ **実施種目**: サテライト施設では、「水泳」「水中運動」「卓球」「ボッチャ」「車いすバスケットボール」、地域のその他社会資源では、「散歩（ぶらぶら歩き）」「体操（軽い体操、ラジオ体操など）」「健康体操・ヨガ」「ボッチャ」「ウォーキング」が上位。
- ・ **実施事業**: サテライト施設では、運動・スポーツ教室が約 7 割、スポーツ大会・イベントが約半数で実施、巡回運動・スポーツ教室はほとんど実施していなかった。地域のその他社会資源では、運動・スポーツ教室が約 2 割、スポーツ大会・イベントが約 1 割で実施、巡回運動・スポーツ教室はほとんど実施していなかった。
- ・ **不安や懸念点**: 地域のその他社会資源よりもサテライト施設の方が不安や懸念点を多く持っていた。特にサテライト施設では、「障害者用のスポーツ用具がない」「障害の知識を持ったスタッフがいない」「障害者へのスポーツ指導方法が分からぬ」「施設がバリアフリーではない」など、ハード、ソフト両面において不安を抱いていた。
- ・ **ハブ施設との連携・協働に向けて**: いずれの施設でも、安心・安全な環境整備（器具・設備等）を重視していた。特に、サテライト施設では、スポーツ事業の実施支援や相談、施設スタッフの資質向上に向けた人材育成支援、地域のその他社会資源では、スポーツ支援・指導ができる専門職の派遣、プログラムの情報提供、周知啓発などを重視していた。
- ・ **連携・協働している施設・組織**: サテライト施設では、行政との連携・協働が約 4 割と最も多く、連携・協働している施設や組織がないが約 3 割だった。地域のその他社会資源では、約 5 割が行政、約 3 割が特別支援学校・特別支援学級と連携・協働していた。

(2) 北九州市内のサテライト施設、地域のその他社会資源の潜在的ニーズ調査

① 対象施設の抽出

地域の施設ネットワーク化に向けたモデルとして、福岡県北九州市内の北九州市障害者スポーツセンター・アレアス(以下、アレアス)をハブ施設と定義し、北九州市内の施設を対象として、サテライト施設、地域のその他社会資源を抽出した(図表 2-3)。

● ハブ施設

北九州市障害者スポーツセンター・アレアス

※日本パラスポーツ協会公認パラスポーツセンター協議会加盟施設である。

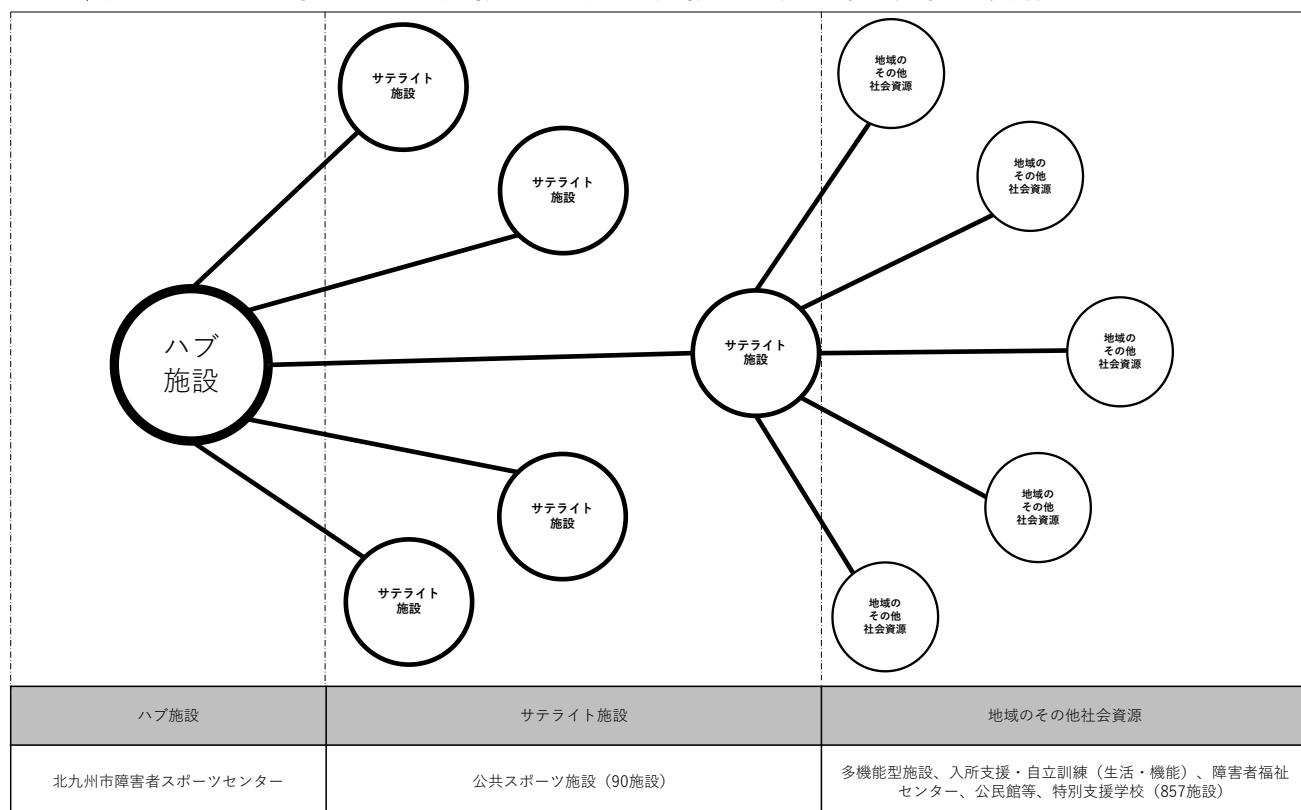
● サテライト施設

北九州市内の公共スポーツ施設(90施設)をサテライト施設とした。

● 地域のその他社会資源

北九州市内の多機能型施設(400施設)、入所支援・自立訓練(生活・機能)(309施設)、障害者福祉センター(2施設)、公民館等(136施設)、特別支援学校(10施設)のあわせて857施設を対象とした。SSF「東京都における障害者スポーツ施設運営に関する研究」(2022)と同規模の調査を実施するために、行政区ごとに施設数を調整し、「【障害児】多機能型施設」(135施設)、「【障害者】入所支援・自立訓練(生活・機能)」(50施設)、「障害者福祉センター」(2施設)、「公民館等」(40施設)、「特別支援学校」(10施設)の合計237施設を抽出した。

図表 2-3 北九州市内のハブ施設・サテライト施設・地域のその他社会資源のネットワーク図



②調査項目

- ・施設の設置、および管理状況
- ・施設の付帯施設の設置状況
- ・施設の利用者の状況
- ・施設の指導者
- ・施設の実施事業
- ・施設の実施種目
- ・利用にあたっての工夫・配慮
- ・アレアスの認知度
- ・連携協働状況

③調査期間

2023年10月～12月

④調査方法

郵送法*

(*注) 対象施設が希望した場合は、調査票データをメールで送付し、回答済み調査票をメール添付で返送いただいた。

⑤回収状況

回収率は31.5%(103施設)で、サテライト施設が47.8%(43施設)、地域のその他社会資源が25.3%(60施設)だった。

⑥調査の実施体制

本研究は、北九州市福祉事業団と篠川スポーツ財団が共同で実施した。

⑦主な調査結果

- ・行政の所管部署: サテライト施設では、スポーツ関連部署が約8割、地域のその他社会資源では障害者福祉／社会福祉関連部署が約8割を占めた。
- ・施設(ハード面): サテライト施設では約4割が「体育館・体育室」もしくは「小体育館・小体育室」を設置、地域のその他社会資源では約1割が「体育館・体育室」もしくは「小体育館・小体育室」を設置していた。
- ・施設(ソフト面): 日本パラスポーツ協会公認「初級パラスポーツ指導員」の資格保有者がいる施設は、サテライト施設、地域のその他社会資源あわせて10.5%(約9割の施設で障害者スポーツ指導に関する有資格者が不在)。
- ・障害者の利用状況: サテライト施設において「障害者の利用があり、利用者数を把握している」のは約6割、地域のその他社会資源では約7割。
- ・実施種目: サテライト施設では「卓球」「バドミントン」「テニス」「水泳」「陸上」、地域のその他社会資源では「散歩(ぶらぶら歩き)」「体操(軽い体操、ラジオ体操など)」「ウォーキング」「水中運動」が上位。

- ・ 実施事業: サテライト施設では、運動・スポーツ教室が約 4 割、スポーツ大会・イベントが約 2 割で実施、巡回運動・スポーツ教室はほとんど実施していなかった。地域のその他社会資源では、運動・スポーツ教室、スポーツ大会・イベントがそれぞれ約 1 割で実施、巡回運動・スポーツ教室はほとんど実施していなかった。
- ・ 不安や懸念点: サテライト施設では「障害の知識を持ったスタッフがいない」「障害者用のスポーツ用具がない」「施設がバリアフリーではない」「障害者のニーズがあるか分からない」が多かった。地域のその他社会資源では「障害者用のスポーツ用具がない」「障害者へのスポーツ指導方法が分からない」「施設がバリアフリーではない」が多く、ハード、ソフト両面において不安を抱いていた。
- ・ ハブ施設との連携・協働に向けて: いずれの施設においても安心・安全な環境整備（器具・設備等）を最も重視していた。加えて、サテライト施設では「障害者スポーツセンターが実施する多様なプログラムの情報提供、周知啓発」、地域のその他社会資源では「障害の種類・程度、目的に応じたスポーツ用具の貸出」「障害者スポーツセンターが実施する多様なプログラムの情報提供、周知啓発」を重視していた。
- ・ 連携・協働している施設・組織: サテライト施設の約半数は連携・協働している施設や組織がなかった。地域のその他社会資源では、約 6 割が「特別支援学校・特別支援学級」、約半数が「行政（区市町村）」、約 4 割が「放課後等デイサービス事業者」と連携・協働していた。

(3) 障害者専用スポーツ施設のあり方

～障害者のスポーツ推進の中核拠点としての役割を果たすために～

①調査期間

2022年9月～2023年3月

②調査の実施体制

本研究は、東京都障害者スポーツ協会と笹川スポーツ財団が共同で実施した。

③主な調査結果

東京都障害者スポーツ協会が指定管理者として運営する東京都障害者総合スポーツセンターと東京都多摩障害者スポーツセンターの役職員との議論を経て、障害者専用スポーツ施設のあり方を5項目に定義した。

- 1) 障害の種類・程度、利用の目的などに応じてスポーツができる設備・用具がある：安心・安全をハード面で保障
- 2) 障害の種類・程度、利用の目的などに応じて日常的にスポーツ支援・指導ができる専門職がいる：安心・安全をソフト面で保障
- 3) 多様な活動機会を通じて、ささえる人材の育成・養成・実践の場を提供する
- 4) 障害の種類・程度・利用の目的などに応じた個別相談・インターク（初回相談）、スポーツ教室、大会など多様なプログラムを実施する
- 5) 関係機関・団体と連携・協働し、地域におけるネットワーク構築の主体的な役割を担い、スポーツ環境を整備する

(4) 障害者専用スポーツ施設における専門職のあり方

～障害者のスポーツとの出会いや活動の充実に寄り添えるキーマンとしての期待～

①調査期間

2022年9月～2023年3月

②調査の実施体制

本研究は、東京都障害者スポーツ協会と笹川スポーツ財団が共同で実施した。

③主な調査結果

東京都障害者スポーツ協会が指定管理者として運営する東京都障害者総合スポーツセンターと東京都多摩障害者スポーツセンターの役職員との議論を経て、障害者専用スポーツ施設における専門職のあり方として、専門職が備えるべき能力を3つにまとめた。

1) 支援力・指導力

→障害の種類・程度、利用の目的などを問わず、一人ひとりに向き合いスポーツ支援・指導ができる

2) 想像力・創造力

→各施設や場所の特色を理解し、障害者のスポーツ環境を整えることができる

3) 発信力・調整力・情報収集力

→障害者スポーツに関する情報を発信し、地域の関係機関・団体をつなげることができる

(5) 施設トランジション(移行)の事例ヒアリング

①調査期間

2023年9月～2024年2月

②調査の実施体制

本研究は、東京都障害者スポーツ協会と笹川スポーツ財団が共同で実施した。

③主な調査結果

ハブ施設、サテライト施設、地域のその他社会資源の施設ネットワークは、年代やライフステージにより変わりゆく障害者のニーズや健康状態に対応し、利用するスポーツ施設のトランジション(移行)を可能にする(図表 2-4)。施設のネットワーク化の進展により、「地域移行」「加齢等による障害の重度化」「専門性・競技性の向上」の3つの面から、障害者のスポーツ活動の幅が広がると考える。

1) 地域移行

施設、指導者、そして共に活動する仲間が充実したハブ施設でスポーツを始めた障害者が、体力・技術を身につけて、自宅や職場により近いサテライト施設や地域のその他社会資源に活動の場を移したり、ハブ施設での活動と併用したりする。サテライト施設や地域のその他社会資源では、障害のない人に交じって活動する機会も広がる。

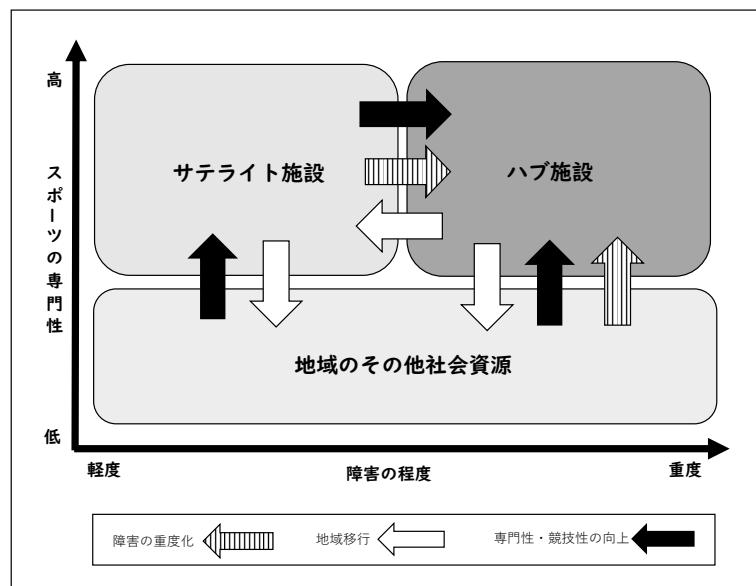
2) 加齢等による障害の重度化

サテライト施設や地域のその他社会資源で活動していた障害者が、加齢や疾病により障害が重度化(重複化の場合もあり)し、スポーツをするのが難しくなった際にハブ施設に移ることで、充実した施設と専門性の高い指導者のもとで、スポーツをやめずに続けることができる。

3) 専門性・競技性の向上

サテライト施設や地域のその他社会資源でスポーツを始めた障害者が、より高い競技レベルを志向したり、より専門性の高い競技・種目に移行(転向)したりする際にサテライト施設からハブ施設へ、地域のその他社会資源からハブ施設やサテライト施設へ活動の場を移行することができる。

図表 2-4 障害者の施設トランジション(移行)イメージ(2022年度時点)



④明らかになった新たな視点

2022年度調査時に想定していた図表2-4の施設トランジション(移行)に新たな視点を2点加えた(図表2-5)。

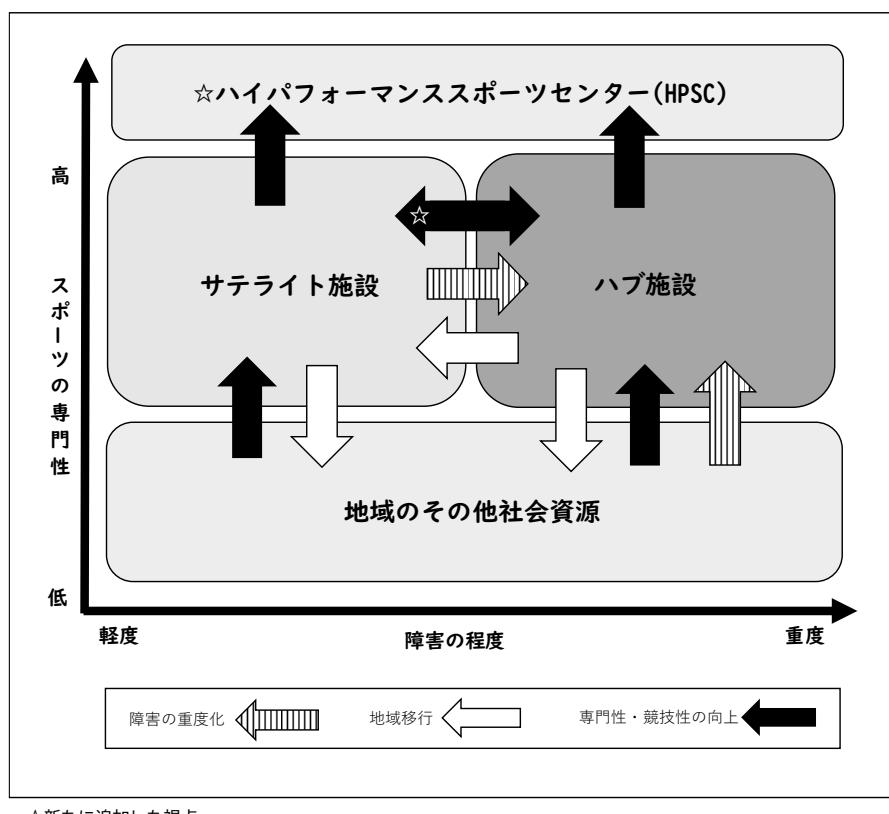
1) ハブ施設以外の練習環境

競技力向上を目指す場合、必ずしもハブ施設の練習環境が最善とは限らないことが確認された。ハブ施設に400mトラックがなく、近隣の公共スポーツ施設にその環境を求める結果、日常利用につながったケースや、アーチェリーの競技特性上、射場の認定証が取得できれば、障害の有無にかかわらず利用できるケースが判明した。利用施設までの動線(陸上トラック、射場、更衣室、入口など)のバリアフリーが確保できれば、サテライト施設でも障害者の競技力向上に貢献できることが分かった。そのため、トランジション(移行)の方向として、【ハブ施設】→【サテライト施設】を追加した。

2) ハイパフォーマンススポーツセンター(HPSC)の活用

日本代表クラスのアスリートはHPSCを利用している。HPSCは、国立スポーツ科学センター(JISS)とナショナルトレーニングセンター(NTC)が持つスポーツ医・科学、情報等による研究支援、および高度な科学的トレーニング環境を提供し、ハイパフォーマンススポーツの強化に貢献する施設である。トランジション(移行)の方向としては、ハブ施設やサテライト施設で練習を積んで移行する可能性が考えられるため、【ハブ施設】→【HPSC】、【サテライト施設】→【HPSC】を追加した。

図表2-5 障害者の施設トランジション(移行)イメージ(2023年度)



☆新たに追加した視点

⑤今後の課題

施設トランジション(移行)の事例からみえてきたのは、ハブ施設、サテライト施設、地域のその他社会資源が、施設同士でネットワークを構築し、場を確保した実態ではなく、利用者自身が個別に活動場所を探し、継続的な活動機会を得ている実態であった。利用者がトランジション(移行)のための施設をみつける負担を減らし、日常的な活動の場を広げていくためには、施設ネットワークの構築が重要になる。

これまでの知見から、地域移行については、長年使用して慣れ親しんだハブ施設から、身近な地域のサテライト施設や地域のその他社会資源に移ることに抵抗を持つ利用者もおり、地域移行が必ずしもうまくいっているわけではないことは明らかである。一方で、一度、地域移行した利用者が障害の重度化に伴い、専門職が常駐するハブ施設に戻ってくるケースもある。その場合、地域移行により解消されていた自宅からハブ施設までのアクセシビリティの問題が再び浮かび上がってくる。

こうした課題を解消するためにも、施設ネットワークにおける各施設の役割や取り組みを明らかにして、地域全体で補完していく仕組みが必要となる。

3. 先行研究における提言

笹川スポーツ財団では、2010 年以来、障害者が身近な地域でスポーツに親しめる社会の実現のためには、障害者スポーツの専門性の高い施設とそのほかの施設とのネットワーク化・連携を促進する必要があると提言してきた。ここでは、スポーツ施設を以下の 3 つに分類した。

1) ハブ施設：

都道府県単位で障害者スポーツの拠点（ハブ）として機能する障害者スポーツセンター

- ① 障害者のスポーツの場のコーディネートや質の高い指導ができる人材がいる障害者専用・優先スポーツ施設

⇒日本パラスポーツ協会「パラスポーツセンター協議会」加盟施設（26 施設／2023 年度時点）

2) サテライト施設：

都道府県・市町村単位で障害者の日常的なスポーツ活動の場となる施設

- ② ①を除く障害者専用・優先スポーツ施設
- ③ ①と②を除く公共スポーツ施設

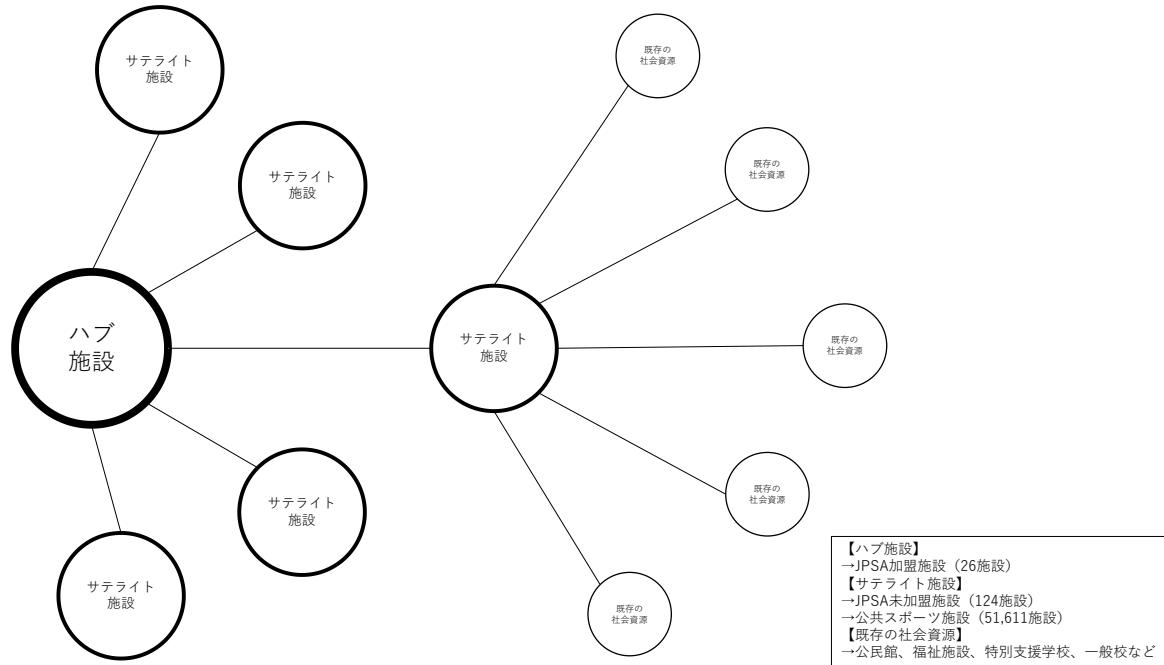
3) 地域のその他社会資源：

ハブ・サテライト施設以外で、障害者のスポーツの場となる施設

- ④ 公民館、福祉施設、特別支援学校・一般校

その上で、それぞれの施設の役割とともに、ハブ施設とサテライト施設、サテライト施設と地域のその他社会資源とのネットワーク化のイメージを示した（図表 2-6）。

図表 2-6 ハブ施設・サテライト施設・地域のその他社会資源とのネットワーク化イメージ（再掲）



障害者のスポーツについて明記されたスポーツ基本法の施行（2011）や東京 2020 大会の開催決定（2013）などを受けて、行政や民間企業の施策や事業が進展し、障害者のスポーツに対する社会の関心は急速に高まってきた。しかし、障害者のためのスポーツ施設のネットワーク化は実現しておらず、地域における障害者のスポーツ環境が充実したとはい難い。東京都「令和 4 年度 障害者のスポーツ施設利用促進事業：アンケート調査」（2022）をみても、公共施設でスポーツを行う障害者は、2015 年の調査と比較して増えていない。新型コロナウイルスに水を差された面はあるものの、東京 2020 大会開催を、障害者の競技スポーツと生涯スポーツの推進につなげるためのさらなる取り組みが求められる。

（1）ハブ施設、サテライト施設、および地域のその他社会資源に求められる取り組み

本研究では、東京都、北九州市を事例に、障害者のスポーツ環境整備の拠点となるハブ施設に求められる役割・機能と、施設で働く専門職が備えるべき能力を整理した。そして、サテライト施設や地域のその他社会資源へのアンケート調査を通じて、「障害者のためのスポーツ施設ネットワーク」（以下、施設ネットワーク）の実現に向けた検討を行った。これまでの知見を踏まえて、障害者のスポーツ活動推進にかかわる 5 つの主な事業・機能について、それぞれの施設に期待される取り組みの具体例を以下に示す（図表 2-7）。

1) 運動・スポーツ相談【ハブ施設】

障害者が運動・スポーツを新たにはじめたい、または再開したい時、障害の種類や程度と本人のニーズを踏まえて、適した種目や活動を紹介する機能

重度障害者が安全にスポーツをする際、医師や理学療法士などの専門家の知見が必要な場合があることから、ハブ施設では運動・スポーツ相談機能が必須要件となる。一方、サテライト施設や地域のその他社会資源では、運動・スポーツをはじめたい障害者（または、その家族）から相談を受けた際、障害の程度にかかわらず、当事者の安全なスポーツ活動に不安がある場合、連携するハブ施設の専門職から気軽に助言が得られるよう施設ネットワーク化による情報共有が必要となる。

2) スポーツ教室【ハブ施設】【サテライト施設】【地域のその他社会資源】

種目別、レベル別、障害種別など、指導者のもとで目的や対象にあわせて実施されるスポーツ教室

ハブ施設では、経験豊富な専門職が複数配置されているため、さまざまな種目で、初心者向けから、中・上級者向けの教室が提供できる。重度障害者向けの水泳教室などは、施設とスタッフが充実したハブ施設ならではの教室である。サテライト施設や地域のその他社会資源でも、日本パラスポーツ協会公認の指導員資格を持つ施設職員や障害者スポーツ指導者協議会から派遣される指導者により、種目別の障害者スポーツ教室や、障害の有無にかかわらず誰もが参加できるスポーツ教室などを開催するケースが増えつつある。ハブ施設利用者のなかには、身近な公共スポーツ施設等に活動の場がないために、長時間かけてハブ施設に通っている障害者もいる。サテライト施設や地域のその他社会資源で、障害者が参加できるプログラムが充実すれば、障害者が自宅により近いところでスポーツを楽しめるようになる。教室を開催する人材やノウハウのないサテライト施設や地域のその他社会資源に、ハブ施設の指導者が出張して行われる、いわゆる「出前教室」は、ハブ施設の重要な支援機能のひとつである。

3) クラブ・サークル活動支援【ハブ施設】【サテライト施設】【地域のその他社会資源】

主に障害者やその家族からなる種目別、障害種別のクラブやサークル

ハブ施設では、スポーツ教室参加者の自立を促すため、サークル設立を支援することが求められる。さらに、サークル活動団体がハブ施設以外の施設でも活動できるよう支援すれば、身近な地域における障害者のスポーツの場の充実につながる。サテライト施設や地域のその他社会資源において、障害者のクラブ・サークルの団体利用は限られている。障害者向けのスポーツ教室を実施している施設は、教室参加者（過去の参加者を含む）にクラブ・サークルの設立を働きかけることが期待される。

4) 大会・イベント・体験会【ハブ施設】【サテライト施設】

障害者の種目別競技大会や障害のある人とない人が競い合う交流大会、障害のない人も参加できる障害者スポーツ体験会など

施設を使用しないウォーキングイベントなどの例外はあるが、一度に多くの人が集まり、はじめての施設利用者を含む参加者の安全確保が必要なことから、施設や運営スタッフの充実したハブ施設やサテライト施設での開催が基本となる。大会・イベント等をきっかけに、新たに施設でスポーツを定期的に行う障害者を増やすために、参加者を障害者向けのスポーツ教室やトレーニング室の利用者講習会などに誘導する工夫も必要となる。

5) 講習会・研修会【ハブ施設】【サテライト施設】

障害者のスポーツ活動現場をささえる人材の育成を目的とした講習会・研修会

ハブ施設や一部のサテライト施設では、日本パラスポーツ協会公認パラスポーツ指導員の養成講習会が開催されている（自治体の主催を含む）。また、指導者等のスキルアップのためのフォローアップ講習会や、資格取得後、活動機会に恵まれなかった人を対象としたリ・スタート研修会などを通じた指導者育成も、ハブ施設の重要な役割である。このほか、サテライト施設のなかには、施設や自治体が主催し、障害者のスポーツ指導や、障害者のスポーツ活動のサポート役を担う人材を育成する独自の研修会を行っているところもある。スポーツ種目の指導が難しくても、スポーツ教室の運営を補助する立場で、障害者のスポーツ活動支援に貢献できる人材を確保する取り組みが期待される。

1)～5)で示したハブ施設、サテライト施設、地域のその他社会資源がそれぞれの役割を果たし、各施設で事業を効果的に実施していくためには施設ネットワークの構築が不可欠となる。各地域で障害者のスポーツ環境は異なるが、地域全体で補完していく仕組みとして、施設ネットワークが進むことを期待したい。

図表 2-7 施設の役割別に求められる障害者のスポーツ推進事業：東京都の事例より

	【ハブ施設】 障害者 スポーツセンター	【サテライト施設】 障害者優先 スポーツ施設 公共スポーツ施設	【地域の その他社会資源】 公民館、福祉施設、 特別支援学校、一般校等
1. 「運動・スポーツ相談」事業	◎	○	○
障害者が運動・スポーツを新たに始めた い・再開したい時、障害の種類や程度と 本人のニーズを踏まえて、適した種目や 活動を紹介する機能	医師・理学療法士等に によるスポーツ医事相談、 運動相談など	ハブ施設からの助言	ハブ施設からの助言
2. 「スポーツ教室」事業	◎	○	○
種目別、レベル別、障害種別など、目的 や対象にあわせて実施されるスポーツ教 室	種目別教室、 初・中・上級向け教室、 重度障害者向け教室、 出前教室等	種目別教室、 初心者向け教室、 障害の有無に かかわらず参加できる 運動・スポーツ教室	種目別教室、 初心者向け教室、 障害の有無に かかわらず参加できる 運動・スポーツ教室
3. 「クラブ・サークル活動支援」事業	◎	○	○
障害者やその家族からなる種目別、障害 種別のクラブやサークル	クラブ・サークル設立支 援 クラブ・サークルの 地域移行（サテライト施 設 等利用）支援	クラブ・サークル設立支 援 (教室参加者への 働きかけ)	クラブ・サークル設立支 援 (教室参加者への 働きかけ)
4. 「大会・イベント・体験会」事業	◎	○	
障害者の種目別競技大会や障害のある人 とない人が競い合う交流大会、障害者ス ポーツの体験会など	大会・イベント・ 体験会の主催、 参加者の施設定期利用の 促進	大会・イベント・ 体験会の主催・共催、 参加者の施設定期利用の 促進	
5. 「講習会・研修会」事業	◎	○	
障害者のスポーツをささえる人材の育成 を目的とした講習会・研修会	指導者の養成講習会、 フォローアップ講習会、 リ・スタート研修会、 指導補助・教室運営補 助、人材育成の研修会	指導者の養成講習会、 指導補助・教室運営補 助、人材育成の研修会	

◎必須要件 ○任意要件

(2) 施設ネットワークに期待される効果

ハブ施設、サテライト施設、および地域のその他社会資源が地域単位でネットワーク化すれば、それぞれの施設における障害者のスポーツ参加の受け皿が広がる。スポーツ庁「令和5年度 障害児・者のスポーツライフに関する調査研究」において、運動・スポーツを実施する施設で最も多いのは「自宅(入所施設含む)」(46.8%)であることがわかっている。スポーツ参加に消極的な障害者に対して、自宅や職場の近くにある身近なスポーツ環境が有効であることから、自宅やその周辺の施設をきっかけとして、地域の公共スポーツ施設や学校開放施設、福祉施設など、サテライト施設や地域のその他社会資源への期待が大きい。

1) ネットワークのメリット

施設ネットワークの最大のメリットは、ハブ施設のノウハウがサテライト施設や地域のその他社会資源に生かされることである。ハブ施設の支援を受けたサテライト施設に、障害者の受入ノウハウが蓄積され、それが周辺の社会資源にも波及していく。サテライト施設や地域のその他社会資源でスポーツをする障害者が増えれば、施設ネットワークの重要性の理解が深まり、障害者のスポーツ振興に必要な予算措置にもつながると考える。さらには、それが口コミなどで広まり、新たな障害者のスポーツ参加希望の問合せも増えてくるだろう。専門性の高い種目をやりたい障害者や重度障害者からの問合せがあれば、ハブ施設が助言を求められ、個々の障害者のニーズに丁寧に対応していくことになる。

2) 場の拡充と多様化の実現

施設ネットワークは、障害者のスポーツとの出会いの場の拡充と、障害者のスポーツ活動の多様化の実現につながる。ハブ施設、サテライト施設、地域のその他社会資源が地域単位で連携し、提供する事業・サービスのすみ分けを行うことで、障害の種類や程度、活動の目的などが異なる障害者の多様なニーズへの対応が可能となる。障害者がスポーツに触れるきっかけは人によりさまざまである。そのため、施設ネットワークを通じて、障害者がいつ、どの入口(施設)から入っても(問合せ・相談をしても)、その人に適した活動の場を提供できる体制を整える必要がある。

3) トランジション(移行)の可能性

また、施設ネットワークは、年代やライフステージにより変わりゆく障害者のニーズや健康状態に対応し、利用するスポーツ施設のトランジション(移行)を可能にする。これにより、「地域移行」「加齢等による障害の重度化」「専門性・競技性の向上」の3つの面から、障害者のスポーツ活動の幅を広げることができる(図表2-8)。

① 地域移行

施設、指導者、そして共に活動する仲間が充実したハブ施設でスポーツをはじめた障害者が、体力・技術を身につけて、自宅や職場により近いサテライト施設や地域のその他社会資源に活動の場を移したり、ハブ施設での活動と併用したりする。サテライト施設や地域のその他社会資源では、障害のない人に交じって活動する機会も広がる。

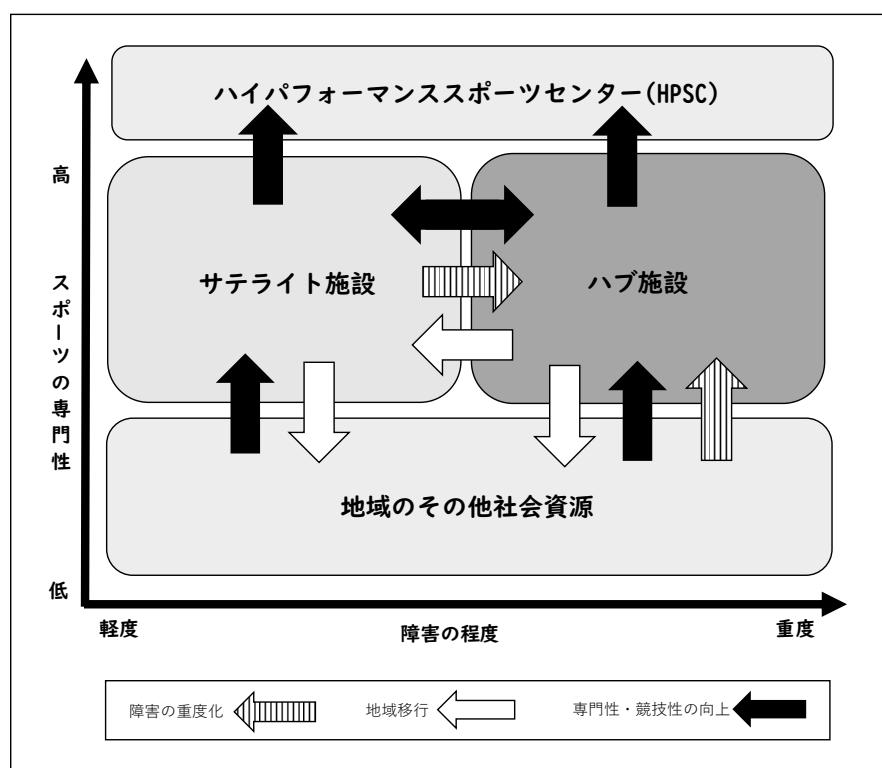
② 加齢等による障害の重度化

サテライト施設や地域のその他社会資源で活動していた障害者が、加齢や疾病により障害が重度化(重複化の場合もあり)し、スポーツをするのが難しくなった際、ハブ施設に移ることで、充実した施設と専門性の高い指導者のもとで、スポーツをやめずに続けることができる。

③ 専門性・競技性の向上

サテライト施設や地域のその他社会資源でスポーツをはじめた障害者が、より高い競技レベルを志向したり、より専門性の高い競技・種目に移行(転向)したりする際に、サテライト施設からハブ施設へ、地域のその他社会資源からハブ施設やサテライト施設へ活動の場を移行できる。

図表 2-8 施設ネットワークによる障害者のスポーツ活動の多様化



(3) 施設ネットワークの実現に向けて

1) ハブとなる施設の整備・充実

障害者が身近な地域でスポーツに親しめる社会を実現する施設ネットワークを構築するためには、ハブ施設となる障害者スポーツセンターの機能の一層の充実が求められる。サテライト施設との連携は、充実したハブ施設の存在があつてはじめて可能となるのはいうまでもない。また、東京都や北九州市と同様、他地域においても、障害者スポーツセンターの機能強化は地域における障害者のスポーツ推進に有効であると考えられる。現在、ハブ施設と想定する日本パラスポーツ協会「パラスポーツセンター協議会」(以下、センター協議会)加盟施設は、18 都府県の 26 施設(2023 年度時点)に限られている。ネットワークを全国に普及するためには、都道府県ごとに少なくともひとつ、人口規模や面積の大きいところではそれ以上の障害者スポーツセンターを整備する必要がある。

この提案は国の方針とも一致している。文部科学省が 2022 年 8 月に発表した「障害者スポーツ振興方策に関する検討チーム報告書～東京大会のレガシーを基盤とした、スポーツを通じた共生社会の構築に向けて～」には、「都道府県ごとに障害者スポーツセンターが設置されていることが望まれる」「都道府県等に対して、各地域における障害者スポーツの拠点となる障害者スポーツセンターの整備を促す」の記述がある。国や地方の財政状況を考慮すると、障害者スポーツセンター未整備自治体で施設を新設するのは容易ではない。既存の障害者優先スポーツ施設等の体制を強化し、センターに「格上げ」することを現実的な選択肢とともに、規模の大きな施設がない自治体では、複数の施設をあわせて障害者スポーツセンターに位置付けることも検討するべきであろう。

2) ハブ施設のあり方

本研究では、東京都の 2 施設を参考に、拠点としての障害者スポーツセンターのあり方を検討し、5 項目の要件を定義した。今後はこれを原案に、ほかの道府県を含めた実践研究に取り組み、国、日本パラスポーツ協会、そしてセンター協議会加盟施設などと協力しながら、都道府県単位でハブ施設の役割を担える障害者スポーツセンターの運営体制や機能を詳細に検討していく。運営する施設の規模やカバーする基礎自治体数とその面積などを参考に、配置される職員の適正人員数の算出を自治体と施設が協働で検討していく必要がある。障害者スポーツセンターにおいて、施設の運営業務のかたわら、ネットワークのコーディネート役を担うことができる人材は限られており、他地域のセンター協議会加盟施設も同様の状況であると推察される。都道府県には、障害者スポーツセンターがハブ施設として十分な機能を果たせるよう、専門職の増員や人材育成を前提とした事業や予算配分の見直しを求めていきたい。

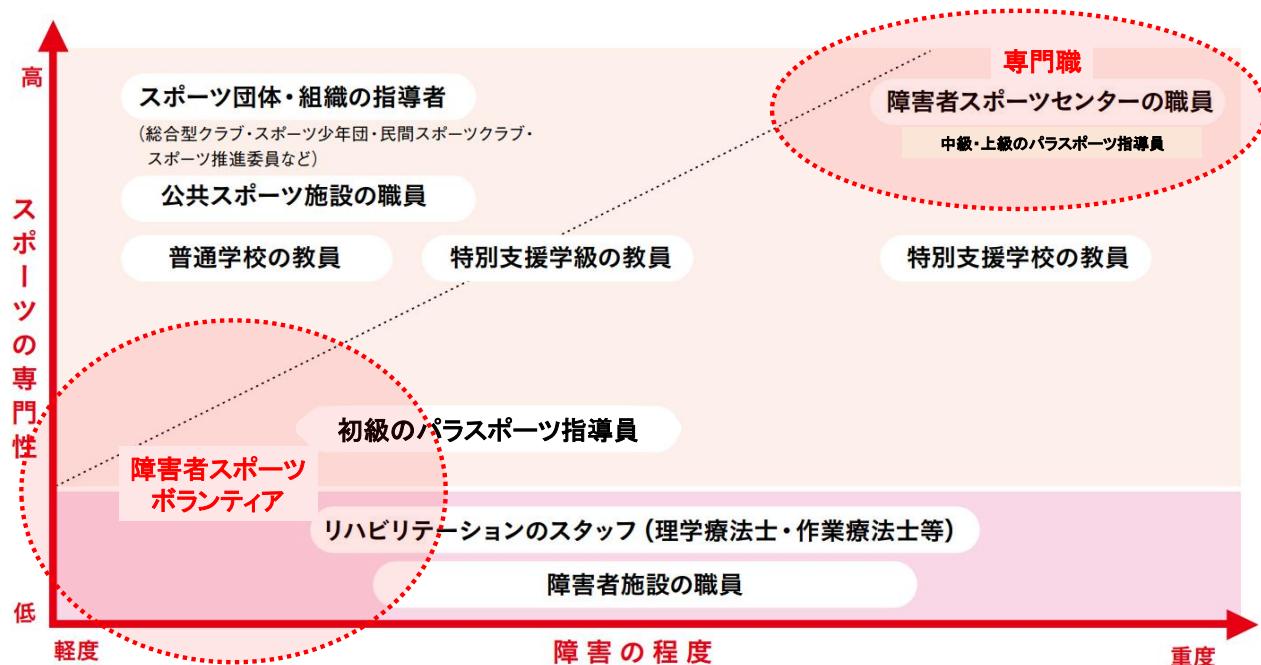
東京都と東京都障害者スポーツ協会は、地域の公共スポーツ施設や民間スポーツ施設を利用する障害者を増やすため、施設管理者に向け 2022 年度に「障害者のスポーツ施設利用促進マニュアル」を制作し(2015 年度に制作したマニュアルを改訂)、障害者スポーツセンターや都内の公共施設における障害者利用のための工夫や配慮の事例などを多数紹介している。このマニュアルを教材に、東京都の 2 つの障害者スポーツセンターが周辺自治体の公共スポーツ施設や福祉施設、学校施設における障害者の利用を促し、都内自治体から全国のモデルケースとなる施設ネットワークが生まれることが期待される。

3) 人材の活用

障害者スポーツセンターがハブ施設として十分な機能を果たすためにも、人材の活用は最優先事項である。本研究では、東京都を例に、障害者専用スポーツ施設における専門職のあり方について整理したが、専用施設に限らず、ほかのハブ施設やサテライト施設でも同様の能力を備える職員が常駐するのが理想である。センター協議会加盟施設において、専門職の育成、確保が課題となっているのは前述の通りだが、施設ネットワークを効果的に機能させるためには、ハブ施設の有給スタッフだけでは十分とはいえない。多様な事業を展開している東京都障害者総合スポーツセンターや多摩障害者スポーツセンターでも不十分であったが、北九州市障害者スポーツセンター・アレアスでも改めて十分でないことが確認された。

それらの解決策として、障害者スポーツボランティアの活用が重要となる。北九州市障害者スポーツボランティア組織・SKET を例に、ボランティア活動の一例を整理したが、当事者と一緒にスポーツを楽しむスポーツセンター・アレアスの運営支援や大会への付き添い、活動歴が長い会員の場合は教室の主指導としてかかわる場合もあり、活動の幅は広い。JPSA「令和 4 年度国庫補助事業 公認障がい者スポーツ指導員実態調査報告書」において、パラスポーツ指導員の活動実態が明らかになったが、指導員として日常的に活動していくためには、資格取得後 2 年以内に活動機会を得て、月 1 回の定期的な活動の継続が重要とされている。これは、障害者スポーツボランティアでも同様と考える。ボランティア登録に向けた講習会や研修会を受講後、定期的な活動機会の提供がボランティア活動の定着につながるだろう。多様な人材が障害者スポーツの環境整備にかかわることが充実につながるのはいうまでもない(図表 2-9)。なお、ここで示したモデルは人材の多様性を概念化したものであり、専門職のなかにもボランティアとして専門性の高い指導をしている人がいることを追記しておく。

図表 2-9 障害者のスポーツ指導にかかわる人材の多様性モデル



III. 実践研究(地域の障害者スポーツ振興における施設ネットワーク実践研究:2024年度)

1. 江戸川区の障害者スポーツ振興における施設ネットワーク実践研究

2024年度の実践研究実施に向けた準備段階として2023年度に施設ネットワーク検討会議を設置してモデルプログラムを作成、2024年度にモデルプログラムを実施した。

(1) 施設ネットワーク検討会議の開催(2023年度)

江戸川区におけるサテライト施設、地域のその他社会資源の実情を把握し、施設ネットワークを実現するにあたっての問題点、課題を明らかにし、モデルプログラムを作成するために施設ネットワーク検討会議を設置した(図表3-1)。

**図表3-1 江戸川区施設ネットワーク検討会議委員
(所属は2023年度調査時。敬称略、50音順)**

氏名	所属
上山亜紀子	東京都生活文化スポーツ局スポーツ総合推進部パラスポーツ課課長
笈川晋一	江戸川区文化共育部スポーツ振興課課長
大磯園子	東京都立鹿本学園PTA代表会長
佐々木ゆみ	東京都障害者スポーツ協会スポーツ振興課課長
佐野敏勝	江戸川ろう者協会理事長
山田勝之	江戸川区総合体育館館長

(2) 江戸川区モデルプログラム作成(2023年度)

2024年度の実施に向けて、施設ネットワーク検討会議で議論を重ねた(図表 3-2)。具体的な作成プロセスは以下の通りである。

- 1) 対象者である鹿本学園の生徒と保護者のニーズを聞き出す(①②⑧)。
- 2) 事務局でモデルプログラム素案を作成する(③⑤⑦⑨)。
- 3) 施設ネットワーク検討会議で実践に向けての意見交換を行う(④⑪)。
- 4) 該当する関係者から都度意見を聞く(⑥⑩)。

なお、プログラムが終了した翌年度以降を見越して、日常的に親子で施設を利用できるよう生徒と保護者が一緒に参加する形態とした。

図表 3-2 江戸川区モデルプログラム作成プロセス

日付	内容	対応者
2023/12/4	①鹿本学園PTAに実態把握のヒアリング	鹿本学園PTA／事務局
2024/1/10	②鹿本学園PTAにプログラムについての懸念点、障壁などをヒアリング	鹿本学園PTA役員／事務局
	③プログラム案_Ver1.0を生成	事務局
2024/1/19	④施設ネットワーク検討会議で議論	施設ネットワーク検討会議委員
	⑤プログラム案_Ver 1.1を生成	事務局
2024/2/15	⑥プログラム生成会議（具体的な内容、日程）	江戸川区バラススポーツ係 江戸川区総合体育館 東京都障害者スポーツ協会
	⑦プログラム案_Ver 1.2を生成	事務局
2024/2/26	⑧鹿本学園PTAに案_Ver 1.2をもとに意見交換	鹿本学園PTA役員／事務局
	⑨プログラム案_Ver 1.3を作成	事務局
	⑩現場で指導する総合SC担当者との意見交換	東京都障害者スポーツ協会／事務局
2024/3/22	⑪施設ネットワーク検討会議で最終案の議論	施設ネットワーク検討会議委員

(3) 江戸川区モデルプログラム概要(2024年度)

モデルプログラムの目的は以下の通りである。

- 1) 保護者と一緒に参加してもらい支援方法を経験してもらう。将来的には、ヘルパーなどに支援方法を伝え、スポーツ活動の際にはヘルパーに同行してもらい保護者のレスパイト(日頃の介護からのリフレッシュや負担軽減を図る)につなげる。
- 2) 東京都障害者総合スポーツセンターの職員(専門職)と江戸川区総合体育館のスタッフが一緒に指導していくなかで、最終的に江戸川区総合体育館のスタッフが重度障害者を指導できるようにする。
- 3) 理学療法士が補助する公民館(区民館、コミュニティ会館等)の既存プログラムに参加するなかで、身近な地域でのスポーツ機会の選択肢を増やす。

第1フェーズから第2フェーズへの地域移行の概要は図表3-3の通りである。第1フェーズの実施場所をハブ施設、第2フェーズの実施場所をサテライト施設、地域のその他社会資源とした。

第1フェーズはハブ施設である東京都障害者総合スポーツセンター(第1回、第2回)で実施、第2フェーズは江戸川区内のサテライト施設である江戸川区総合体育館(第4回、第5回、第8回)、地域のその他社会資源である小岩アーバンプラザ、東部区民館、中平井コミュニティ会館、葛西区民館(第3回、第6回、第7回)を会場とした。

実際には、参加者の居住地と交通アクセス等を考慮した結果、地域のその他社会資源の会場として利用されたのは小岩アーバンプラザと東部区民館であった。参加者と保護者は図表3-4、モデルプログラム実施概要は図表3-5にまとめた。

図表3-3 江戸川区モデルプログラムにおける地域移行の概要

第1フェーズ		第2フェーズ	
実施回	第1回／第2回	実施回	第4回／第5回／第8回
施設形態	ハブ施設	施設形態	サテライト施設
会場	東京都障害者総合スポーツセンター	会場	江戸川区総合体育館
		実施回	
		第3回／第6回／第7回	
		施設形態	地域のその他社会資源
		会場	
		・小岩アーバンプラザ ・東部区民館 ・中平井コミュニティ会館 ・葛西区民館	

图表 3-4 江戸川区モデルプログラム参加者(所属は 2024 年度調査時。敬称略、五十音順)

参加者名	所属	保護者名
道解真人	東京都立鹿本学園 高等部 1年	道解麻由美
平田友吾	東京都立鹿本学園 小学部 2年	平田絢子
山田稟子	東京都立鹿本学園 中学部 3年	山田靖子
吉野叶恋	東京都立鹿本学園 高等部 1年	吉野純子

图表 3-5 江戸川区モデルプログラム実施概要

フェーズ	回数	日時	会場	主指導	指導補助	備考
第1フェーズ	第1回 第2回	① 2024/6/22(土) 13:30-14:30	東京都障害者 総合スポーツセンター プール	・東京都障害者総合スポーツセン ターアジト(専門職) ・NPO法人ゆめけん	・パラスポーツ指導員 ・江戸川区総合体育館スタッフ	既存教室「重度障害者のため のプールひろば」を活用
		② 2024/6/29(土) 13:30-14:30				
		③ 2024/7/20(土) 14:45-15:45				
		④ 2024/8/12(祝) 13:30-14:30				
		⑤ 2024/8/25(日) 13:30-14:30				
		⑥ 2024/9/23(祝) 13:30-14:30				
第2フェーズ	第3回	2024/10/12(土) 10:00-11:30	東部区民館	・江戸川区総合体育館スタッフ	・理学療法士(東京都理学療法士協会) ・東京都障害者総合スポーツセンター職員 (専門職)	既存教室「パラスポーツ初心 者教室」を活用
		14:00-15:30	小岩アーバンプラザ			
	第4回	2024/11/24(日) 9:00-12:00	江戸川区総合体育館 プール	・東京都障害者総合スポーツセン ターアジト(専門職)	・江戸川区総合体育館スタッフ	新規事業として実施
	—	2024/11/24(日) 13:00-17:00	江戸川区総合体育館 研修室	・東京都障害者総合スポーツセン ターアジト(専門職)	【えどがわパラスポーツアンバサダー向け研修会】	
	第5回	2024/12/15(日) 11:00-11:45	江戸川区総合体育館 アーチェリー場	・江戸川区総合体育館スタッフ	・えどがわパラスポーツアンバサダー ・東京都障害者総合スポーツセンター職員 (専門職)	既存教室「なかよし運動教 室」を活用
	第6回	2025/1/11(土) 10:00-11:30	東部区民館	・江戸川区総合体育館スタッフ	・理学療法士(東京都理学療法士協会) ・えどがわパラスポーツアンバサダー ・東京都障害者総合スポーツセンター職員 (専門職)	既存教室「パラスポーツ初心 者教室」を活用
	第7回	2025/2/8(土) 14:00-15:30	小岩アーバンプラザ	・江戸川区総合体育館スタッフ	・理学療法士(東京都理学療法士協会) ・えどがわパラスポーツアンバサダー ・東京都障害者総合スポーツセンター職員 (専門職)	既存教室「パラスポーツ初心 者教室」を活用
	第8回	2025/3/20(祝) 9:00-12:00	江戸川区総合体育館 プール	・江戸川区総合体育館スタッフ	・東京都障害者総合スポーツセンター職員 (専門職)	新規事業として実施

(4) 江戸川区モデルプログラム詳細(2024年度)

江戸川区モデルプログラムの詳細を各回でまとめた。ハブ施設である東京都障害者総合スポーツセンターで行われた第1フェーズ(第1回、第2回)を図表3-6、3-7、3-8、3-9、3-10、3-11に記載した。第1フェーズは、参加者の状態をより詳しく把握するために、教室1回に対して親子1組の参加とした。参加親子3組がそれぞれ2回ずつ教室に参加できるようにしたため、第1フェーズの教室回数は合計6回となっている。

会場を江戸川区内の施設に移した第2フェーズの詳細は、実施日順にまとめた。地域のその他社会資源である東部区民館と小岩アーバンプラザで実施された第3回を図表3-12に、サテライト施設である江戸川区総合体育館プールで実施された第4回を図表3-13にまとめた。第4回を実施した日の午後には、えどがわパラスポーツアンバサダーを対象に、重度障害者のスポーツ支援についての研修会を開催した(図表3-14)。第5回は研修会に参加したパラスポーツアンバサダーの実践の場も兼ねて、サテライト施設である江戸川区総合体育館アーチェリー場で行った(図表3-15)。第6回、第7回は、第3回と同じ会場である東部区民館と小岩アーバンプラザでそれぞれ実施した(図表3-16、3-17)。最終回である第8回は、第4回と同会場の江戸川区総合体育館プールで実施した(図表3-18)。

図表 3-6 江戸川区モデルプログラム詳細(第1回／第2回)①

施設ネットワーク	【ハブ施設】東京都障害者総合スポーツセンター
	【サテライト施設】江戸川区総合体育館
	【地域のその他社会資源】小岩アーバンプラザ／東部区民館
実施回数	第1回
実施日	2024年6月22日（土）
実施時間	13：30～14：30
実施会場	東京都障害者総合スポーツセンター プール
メイン指導者	<ul style="list-style-type: none"> ・東京都障害者総合スポーツセンター職員（専門職） ・NPO法人ゆめけん
サポートスタッフ	<ul style="list-style-type: none"> ・日本パラスポーツ協会公認パラスポーツ指導員 ・江戸川区総合体育館スタッフ
見学	<ul style="list-style-type: none"> ・江戸川区スポーツ振興課 ・江戸川区総合体育館スタッフ
参加親子	1組（平田親子）
参加者詳細	平田友吾（8歳）
実施内容	<ul style="list-style-type: none"> ・入水、退水確認 ・水慣れ、水中での状態確認 ・歩行、ジャンプ、（ポールつかまって） ・背浮きの確認 ・泳法の体勢確認 ・泳力チェック ・状況に応じて個別対応
備考	東京都障害者総合スポーツセンターの既存教室「重度障害者のためのプールひろば」を活用

図表 3-7 江戸川区モデルプログラム詳細(第1回／第2回)②

施設ネットワーク	【ハブ施設】東京都障害者総合スポーツセンター
	【サテライト施設】江戸川区総合体育館
	【地域のその他社会資源】小岩アーバンプラザ／東部区民館
実施回数	第2回
実施日	2024年6月29日 (土)
実施時間	13:30～14:30
実施会場	東京都障害者総合スポーツセンター プール
メイン指導者	<ul style="list-style-type: none"> ・東京都障害者総合スポーツセンター職員（専門職） ・NPO法人ゆめけん
サポートスタッフ	<ul style="list-style-type: none"> ・日本パラスポーツ協会公認パラスポーツ指導員 ・江戸川区総合体育館スタッフ
見学	<ul style="list-style-type: none"> ・江戸川区スポーツ振興課 ・江戸川区総合体育館スタッフ
参加親子	1組（平田親子）
参加者詳細	平田友吾（8歳）
実施内容	<ul style="list-style-type: none"> ・入水、退水確認 ・水慣れ、水中での状態確認 ・歩行、ジャンプ、（ポールつかまって） ・背浮きの確認 ・泳法の体勢確認 ・泳力チェック ・状況に応じて個別対応
備考	東京都障害者総合スポーツセンターの既存教室「重度障害者のためのプールひろば」を活用

図表 3-8 江戸川区モデルプログラム詳細(第1回／第2回)③

施設ネットワーク	【ハブ施設】東京都障害者総合スポーツセンター
	【サテライト施設】江戸川区総合体育館
	【地域のその他社会資源】小岩アーバンプラザ／東部区民館
実施回数	第1回
実施日	2024年7月20日（土）
実施時間	14：45～15：45
実施会場	東京都障害者総合スポーツセンター プール
メイン指導者	<ul style="list-style-type: none"> ・東京都障害者総合スポーツセンター職員（専門職） ・NPO法人ゆめけん
サポートスタッフ	<ul style="list-style-type: none"> ・日本パラスポーツ協会公認パラスポーツ指導員 ・江戸川区総合体育館スタッフ
見学	<ul style="list-style-type: none"> ・江戸川区スポーツ振興課 ・江戸川区総合体育館スタッフ
参加親子	1組（吉野親子）
参加者詳細	吉野叶恋（15歳）
実施内容	<ul style="list-style-type: none"> ・入水、退水確認 ・水慣れ、水中での状態確認 ・歩行、ジャンプ、（ポールつかまって） ・背浮きの確認 ・泳法の体勢確認 ・泳力チェック ・状況に応じて個別対応
備考	東京都障害者総合スポーツセンターの既存教室「重度障害者のためのプールひろば」を活用

図表 3-9 江戸川区モデルプログラム詳細(第1回／第2回)④

施設ネットワーク	【ハブ施設】東京都障害者総合スポーツセンター
	【サテライト施設】江戸川区総合体育館
	【地域のその他社会資源】小岩アーバンプラザ／東部区民館
実施回数	第1回
実施日	2024年8月12日（祝）
実施時間	13：30～14：30
実施会場	東京都障害者総合スポーツセンター プール
メイン指導者	<ul style="list-style-type: none"> ・東京都障害者総合スポーツセンター職員（専門職） ・NPO法人ゆめけん
サポートスタッフ	<ul style="list-style-type: none"> ・日本パラスポーツ協会公認パラスポーツ指導員 ・江戸川区総合体育館スタッフ
見学	<ul style="list-style-type: none"> ・江戸川区スポーツ振興課 ・江戸川区総合体育館スタッフ
参加親子	1組（道解親子）
参加者詳細	道解真人（16歳）
実施内容	<ul style="list-style-type: none"> ・入水、退水確認 ・水慣れ、水中での状態確認 ・歩行、ジャンプ、（ポールつかまって） ・背浮きの確認 ・泳法の体勢確認 ・泳力チェック ・状況に応じて個別対応
備考	東京都障害者総合スポーツセンターの既存教室「重度障害者のためのプールひろば」を活用

図表 3-10 江戸川区モデルプログラム詳細(第1回／第2回)⑤

施設ネットワーク	【ハブ施設】東京都障害者総合スポーツセンター
	【サテライト施設】江戸川区総合体育館
	【地域のその他社会資源】小岩アーバンプラザ／東部区民館
実施回数	第2回
実施日	2024年8月25日（日）
実施時間	13：30～14：30
実施会場	東京都障害者総合スポーツセンター プール
メイン指導者	<ul style="list-style-type: none"> ・東京都障害者総合スポーツセンター職員（専門職） ・NPO法人ゆめけん
サポートスタッフ	<ul style="list-style-type: none"> ・日本パラスポーツ協会公認パラスポーツ指導員 ・江戸川区総合体育館スタッフ
見学	<ul style="list-style-type: none"> ・江戸川区スポーツ振興課 ・江戸川区総合体育館スタッフ
参加親子	1組（吉野親子）
参加者詳細	吉野叶恋（15歳）
実施内容	<ul style="list-style-type: none"> ・入水、退水確認 ・水慣れ、水中での状態確認 ・歩行、ジャンプ、（ポールつかまって） ・背浮きの確認 ・泳法の体勢確認 ・泳力チェック ・状況に応じて個別対応
備考	東京都障害者総合スポーツセンターの既存教室「重度障害者のためのプールひろば」を活用

図表 3-11 江戸川区モデルプログラム詳細(第1回／第2回)⑥

施設ネットワーク	【ハブ施設】東京都障害者総合スポーツセンター
	【サテライト施設】江戸川区総合体育館
	【地域のその他社会資源】小岩アーバンプラザ／東部区民館
実施回数	第2回
実施日	2024年9月23日 (祝)
実施時間	13:30～14:30
実施会場	東京都障害者総合スポーツセンター プール
メイン指導者	<ul style="list-style-type: none"> ・東京都障害者総合スポーツセンター職員 (専門職) ・NPO法人ゆめけん
サポートスタッフ	<ul style="list-style-type: none"> ・日本パラスポーツ協会公認パラスポーツ指導員 ・江戸川区総合体育館スタッフ
見学	<ul style="list-style-type: none"> ・江戸川区スポーツ振興課 ・江戸川区総合体育館スタッフ
参加親子	1組 (道解親子)
参加者詳細	道解真人 (16歳)
実施内容	<ul style="list-style-type: none"> ・入水、退水確認 ・水慣れ、水中での状態確認 ・歩行、ジャンプ、(ポールつかまって) ・背浮きの確認 ・泳法の体勢確認 ・泳力チェック ・状況に応じて個別対応
備考	東京都障害者総合スポーツセンターの既存教室「重度障害者のためのプールひろば」を活用

図表 3-12 江戸川区モデルプログラム詳細(第3回)

施設ネットワーク	【ハブ施設】東京都障害者総合スポーツセンター
	【サテライト施設】江戸川区総合体育館
	【地域のその他社会資源】小岩アーバンプラザ／東部区民館
実施回数	第3回
実施日	2024年10月12日 (土)
実施時間	<ul style="list-style-type: none"> 【AM】10:00～11:30 【PM】14:00～15:30
実施会場	<ul style="list-style-type: none"> 【AM】東部区民館 【PM】小岩アーバンプラザ
メイン指導者	江戸川区総合体育館スタッフ
サポートスタッフ	東京都理学療法士協会所属 理学療法士
見学	<ul style="list-style-type: none"> 江戸川区スポーツ振興課 江戸川区総合体育館スタッフ
参加親子	<ul style="list-style-type: none"> 【AM】2組 (平田親子、山田親子) 【PM】2組 (道解親子、吉野親子)
参加者詳細	<ul style="list-style-type: none"> 【AM】平田友吾 (8歳) ／山田稟子 (15歳) 【PM】道解真人 (16歳) ／吉野叶恋 (15歳)
実施内容	<ul style="list-style-type: none"> 準備体操 ふうせん遊び フライングディスク ボッチャなど
備考	江戸川区の既存教室「パラスポーツ初心者教室」を活用



江戸川区モデルプログラム
(第3回) @ 東部区民館

図表 3-13 江戸川区モデルプログラム詳細(第4回)

施設ネットワーク	【ハブ施設】東京都障害者総合スポーツセンター
	【サテライト施設】江戸川区総合体育館
	【地域のその他社会資源】小岩アーバンプラザ／東部区民館
実施回数	第4回
実施日	2024年11月24日 (日)
実施時間	9:00～12:00
実施会場	江戸川区総合体育館プール
メイン指導者	東京都障害者総合スポーツセンター職員 (専門職)
サポートスタッフ	江戸川区総合体育館スタッフ
見学	江戸川区スポーツ振興課
参加親子	1組 (道解親子)
参加者詳細	道解真人 (16歳)
実施内容	<ul style="list-style-type: none"> ・体調確認 ・着替え誘導 ・準備体操 ・入水対応 ・個別対応 ・退水対応 ・採暖 ・着替え確認 ・振り返り、フィードバック
備考	<p>本実践研究のために新規に作成したプログラム</p> <p>※平田親子、吉野親子は体調不良で欠席</p>



江戸川区モデルプログラム(第4回)
@江戸川区総合体育館プール

図表 3-14 江戸川区モデルプログラム詳細(えどがわパラスポーツアンバサダー研修会)

えどがわパラスポーツアンバサダー研修会	
施設ネットワーク	【ハブ施設】東京都障害者総合スポーツセンター
	【サテライト施設】江戸川区総合体育館
	【地域のその他社会資源】小岩アーバンプラザ／東部区民館
実施日	2024年11月24日（日）
実施時間	13:00～17:00
実施会場	江戸川区総合体育館研修室
講師	東京都障害者総合スポーツセンター職員（専門職）
講義内容	<ul style="list-style-type: none"> ・障害について ・運動への誘導 ・安全管理 ・コーディネート
参加者	えどがわパラスポーツアンバサダー14名
備考	えどがわパラスポーツアンバサダー向け研修会



えどがわパラスポーツアンバサダー研修会

図表 3-15 江戸川区モデルプログラム詳細(第5回)

施設ネットワーク	【ハブ施設】東京都障害者総合スポーツセンター
	【サテライト施設】江戸川区総合体育館
	【地域のその他社会資源】小岩アーバンプラザ／東部区民館
実施回数	第5回
実施日	2024年12月15日 (日)
実施時間	11:00～11:45
実施会場	江戸川区総合体育館アーチェリー場
メイン指導者	江戸川区総合体育館スタッフ
サポートスタッフ	えどがわパラスポーツアンバサダー 東京都障害者総合スポーツセンター職員 (専門職)
見学	江戸川区スポーツ振興課
参加親子	4組 (平田親子、吉野親子、道解親子、山田親子)
参加者詳細	平田友吾 (8歳)、吉野叶恋 (15歳)、道解真人 (16歳)、山田稟子 (15歳)
実施内容	<ul style="list-style-type: none"> ・準備体操 ・ふうせん遊び ・フライングディスク ・ボッチャなど
備考	江戸川区の既存教室「なかよし運動教室」を活用



江戸川区モデルプログラム(第5回)
@江戸川区総合体育館アーチェリー場

図表 3-16 江戸川区モデルプログラム詳細(第6回)

施設ネットワーク	【ハブ施設】東京都障害者総合スポーツセンター
	【サテライト施設】江戸川区総合体育館
	【地域のその他社会資源】小岩アーバンプラザ／東部区民館
実施回数	第6回
実施日	2025年1月11日(土)
実施時間	10:00～11:30
実施会場	東部区民館
メイン指導者	江戸川区総合体育館スタッフ
サポートスタッフ	東京都理学療法士協会所属 理学療法士 えどがわパラスポーツアンバサダー 東京都障害者総合スポーツセンター職員(専門職)
見学	江戸川区スポーツ振興課
参加	1組(平田親子)
参加者詳細	平田友吾(8歳)
実施内容	<ul style="list-style-type: none"> ・準備体操 ・ふうせん遊び ・フライングディスク ・ボッチャなど
備考	江戸川区の既存教室「パラスポーツ初心者教室」を活用 ※山田親子は体調不良で欠席



江戸川区モデルプログラム
(第6回)@東部区民館

図表 3-17 江戸川区モデルプログラム詳細(第7回)

施設ネットワーク	【ハブ施設】東京都障害者総合スポーツセンター
	【サテライト施設】江戸川区総合体育館
	【地域のその他社会資源】小岩アーバンプラザ／東部区民館
実施回数	第7回
実施日	2025年2月8日（土）
実施時間	14:00～15:30
実施会場	小岩アーバンプラザ
メイン指導者	江戸川区総合体育館スタッフ
サポートスタッフ	東京都理学療法士協会所属 理学療法士 えどがわパラスポーツアンバサダー 東京都障害者総合スポーツセンター職員（専門職）
見学	江戸川区スポーツ振興課
参加親子	1組（道解親子）
参加者詳細	道解真人（16歳）
実施内容	<ul style="list-style-type: none"> ・準備体操 ・ふうせん遊び ・フライングディスク ・ボッチャなど
備考	江戸川区の既存教室「パラスポーツ初心者教室」を活用 ※吉野親子は体調不良で欠席



江戸川区モデルプログラム(第7回)
@小岩アーバンプラザ

図表 3-18 江戸川区モデルプログラム詳細(第8回)

施設ネットワーク	【ハブ施設】東京都障害者総合スポーツセンター
	【サテライト施設】江戸川区総合体育館
	【地域のその他社会資源】小岩アーバンプラザ／東部区民館
実施回数	第8回
実施日	2025年3月20日 (祝)
実施時間	9:00～12:00
実施会場	江戸川区総合体育館プール
メイン指導者	江戸川区総合体育館スタッフ
サポートスタッフ	東京都障害者総合スポーツセンター職員 (専門職)
見学	江戸川区スポーツ振興課
参加親子	3組 (平田親子、吉野親子、道解親子)
参加者詳細	平田友吾 (8歳)、吉野叶恋 (15歳)、道解真人 (16歳)
実施内容	<ul style="list-style-type: none"> ・体調確認 ・着替え誘導 ・準備体操 ・入水対応 ・個別対応 ・退水対応 ・採暖 ・着替え確認 ・振り返り、フィードバック
備考	本実践研究のために新規に作成したプログラム



江戸川区モデルプログラム(第8回)
@江戸川区総合体育館プール

(5) 江戸川区総合体育館プールにおける参加者フィードバック後の対応

1) 更衣室の広さ

【指摘事項】

車いすやバギーのままでの乗り入れや介助者の同行を想定すると、更衣室はもう少し広いとありがたい。横になって着替えられる台があると良い。簡易更衣室でも構ないので、重度障害者用に寝かせて着替えられるベッドがあると良い。

【対応策】

①簡易カーテン設置して、個室に変更した。あわせて、赤台を設置し、寝かせた状態でも着替えられるスペースを設置した。赤台は安全面を配慮して四方を補強した。

②採暖室に目隠しシートを貼り、更衣室として使用した。入口の段差はスタッフがフォローした。



更衣室に簡易カーテンを設置して個室に変更



寝かせた状態でも着替えられるように赤台を設置



採暖室に目隠しシートを貼り、更衣室として使用

2) シャワーの水温が不安定

【指摘事項】

多目的更衣室のシャワーの水温が不安定で、急に水になつたり熱くなつたりした。

【対応策】

シャワーの修理に時間を要するため、本プログラム中の使用は中止した。動線を変更して、強制シャワー(人感センターにより自動でシャワーが出るシステム)を利用するようにした。

3) 更衣室の段差

【指摘事項】

更衣室のシャワーに向かう際に段差があり、車いすでシャワーを浴びるのが難しい。

【対応策】

スタッフが段差部分のフォローをした。

※座談会での振り返り内容(P.49 参照)から、必ずしも良い対応だったとはいえない。

4) 更衣室の順番待ち

【指摘事項】

複数の障害者が利用する際に、一度に全員が更衣室に入って着替えができず、更衣室の順番待ちが発生した。待ち時間が長く身体が冷えてしまった。

【対応策】

- ①参加者が同じタイミングで退水して、更衣室の順番待ちにならないように指導者同士で意志疎通を図り、ひとりずつ退水できるようにタイミングをずらして調整した。
- ②簡易プールに温水を入れて暖を取れる場所を作り、体温の低下を防いだ。



簡易プールに温水を入れて
プール退水後の体温低下を防止



簡易プールへの移動をスムーズに
行えるよう赤台を設置

5) スタッフの経験不足

【指摘事項】

- ①プールサイドで使用する車いすの扱い方を十分に理解していないスタッフがいたように感じた。入退水のタイミングで非常に不安になった。
- ②入水時、身体が車いすからずれる感覚があった。

【対応策】

- ①スタッフ間でシミュレーションを複数回繰り返した。
- ②ベルトで固定して、身体がずれないように工夫した。



入水時の身体のズレを防ぐため、
プール用車いすにベルトを設置

6) 隙間からの冷気による室温低下

【指摘事項】

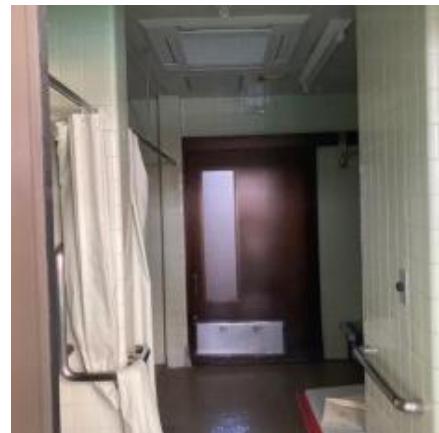
更衣室のドアの隙間や換気口から冷気が入ってきて、室温以上に体感温度が低かった。非常に寒くて、特に冬場は着替えるのが厳しい。

【対応策】

ドアの隙間をテープやビニール袋で覆うことにより冷気を遮断し、室温低下を防いだ。



更衣室のドアの隙間を
テープとビニールで防ぐ



冷気の侵入を防ぐために
ドアの換気口をテープで塞ぐ

7) 床が滑りやすい

【指摘事項】

更衣室の床がタイルで冷たい上に滑りやすくて着替えるのが危険だった。

【対応策】

すのこを設置して、肌が直接タイルに触れないようにした。

すのこの上に滑り止めシートを置き、濡れた足でも転倒しないように対応した。



更衣室の床に滑り止めを
置いたすのこを設置

(6) 江戸川区モデルプログラムまとめ

プログラムの特徴を以下 5 つにまとめた。

1) プログラムの活用

【第 1 回／第 2 回】

東京都障害者スポーツセンターが実施している「重度障害者のためのプールひろば」に本プログラム用に枠を設定して、各回 1 組の親子が 2 回ずつ参加した。

【第 4 回／第 8 回】

本プログラム用に江戸川区総合体育館プールプログラムとして新規に作成した。

【第 3 回／第 6 回／第 7 回】

江戸川区が実施している「パラスポーツ初心者教室」の参加対象を重度障害者まで広げて、本プログラム参加者が参加できるように調整した。

【第 5 回】

江戸川区総合体育館が実施している「なかよし運動教室」の参加対象を重度障害者まで広げて、本プログラム参加者が参加できるように調整した。

2) プールプログラム指導

【第 1 回／第 2 回】

東京都障害者総合スポーツセンターのプールを会場に、主指導を東京都障害者総合スポーツセンター職員（専門職）が担当し、江戸川区総合体育館スタッフが指導補助としてプールに入り、指導ノウハウを学んだ。

【第 4 回】

会場を江戸川区総合体育館プールに移動し、主指導は引き続き、東京都障害者総合スポーツセンター職員（専門職）が担当し、指導補助として江戸川区総合体育館スタッフがプールに入った。

【第 8 回】

会場は引き続き江戸川区総合体育館プールだが、主指導を江戸川区総合体育館スタッフが行い、指導補助として東京都障害者総合スポーツセンター職員（専門職）が入った。

【第 4 回／第 8 回】

開催前に、江戸川区総合体育館プールに東京都障害者総合スポーツセンター職員（専門職）、江戸川区総合体育館スタッフが集まり、受付、着替え、プールサイドの移動、入水、プール指導など、サテライト施設における重度障害者受入シミュレーションを行った。

3) スタジオプログラム指導

【第 3 回／第 5 回／第 6 回／第 7 回】

主指導を江戸川区総合体育館スタッフが行い、指導補助として東京都障害者総合スポーツセンター職員（専門職）、理学療法士、えどがわパラスポーツアンバサダーが入った。既存のプログラムに重度障害者を受け入れる際の注意事項について専門職から指導を受けた。

4) えどがわパラスポーツアンバサダー

日本パラスポーツ協会公認初級パラスポーツ指導員の資格を保有する江戸川区内で活動する地域ボランティアで、第5回以降のプログラム参加支援を依頼するため、第4回プログラム終了後に、実技と座学を含めた事前研修会（90分）を重度障害児向けの研修を専門職が実施した。

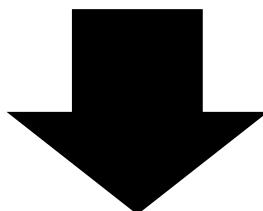
5) 担当制の導入

参加者の安全・安心を確保するため、参加親子を担当する江戸川区総合体育館のスタッフは、第1回から第8回まで変更せず、信頼関係の構築を進めた。

モデルプログラムの目的と成果は以下の通りである。

目的①

保護者と一緒に参加してもらい支援方法を経験してもらう。将来的には、ヘルパーなどへ支援方法を伝え、スポーツ活動の際にはヘルパーに同行してもらい保護者のレスパイト（日頃の介護からのリフレッシュや負担軽減を図る）につなげる。

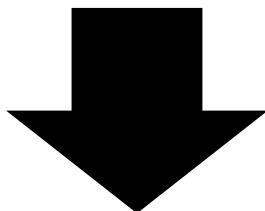


成果①

プールプログラムやスタジオプログラムに保護者が一緒に参加することで支援方法を経験できた。さらに、専門職が保護者に対して当事者シミュレーションを行ったことで、保護者のスポーツ支援方法の理解が深まり、スポーツ支援の重要性を再認識できた。保護者が体調不良でプログラムに一緒に参加できない際には、江戸川区総合体育館のスタッフが保護者役を務めた。その間、保護者はレスパイト（日頃の介護からのリフレッシュや負担軽減を図る）の時間を過ごすことができた。さらに、第三者であるスタッフと一緒に時間を過ごす経験を通じて、子どもの自立が育まれた。

目的②

東京都障害者総合スポーツセンターの職員（専門職）と江戸川区総合体育館のスタッフが一緒に指導することで、最終的に江戸川区総合体育館のスタッフが重度障害者を指導できるようにする。

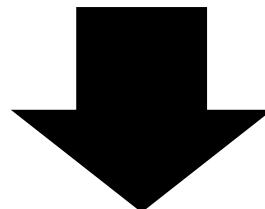


成果②

プログラムを通して、専門職と江戸川区総合体育館スタッフが同じ現場で一緒に指導できた。スポーツ指導と支援の経験が豊富な江戸川区総合体育館スタッフが、重度障害者へのスポーツ指導において、専門職からの指導、フィードバックの機会を複数回得られた。最終回では、江戸川区総合体育館スタッフが自信を持って重度障害者へのスポーツ指導を行った。

目的③

理学療法士が補助する区民館、コミュニティ会館の既存プログラムへの参加を通じて、身近な地域でのスポーツ機会の選択肢を増やす。



成果③

東京都理学療法士協会に所属する理学療法士が、第3回、第6回、第7回にプログラム指導補助として参加した。主指導の江戸川区総合体育館スタッフと協力し、理学療法士としての専門性を生かしながら、当事者支援を行った。最終的には、本プログラム以外に江戸川区が開催するスポーツ教室（理学療法士も指導補助として参加）に本プログラムに参加する親子が参加する機会が生まれ、身近な地域でのスポーツ機会の選択肢が増えた。

(7) 江戸川区モデルプログラム座談会まとめ

江戸川区モデルプログラム関係者による座談会を開催した。当日は、2部構成として、第1部では参加親子4組、第2部では江戸川区総合体育館のスタッフを交え、それぞれ2024年度に実施したモデルプログラムを振り返った。

【第1部 出席者(所属は2024年度調査時。敬称略、五十音順)】

(参加者)

- 道解真人(東京都立鹿本学園 高等部1年)／(保護者)道解麻由美
- 平田友吾(〃 小学部2年)／(保護者)平田絢子
- 山田稟子(〃 中学部3年)／(保護者)山田靖子
- 吉野叶恋(〃 高等部1年)／(保護者)吉野純子

(専門職)

- 佐々木ゆみ(東京都障害者スポーツ協会)
- 屋敷可奈恵(〃)

(ファシリテーター／事務局)

- 小淵和也(笹川スポーツ財団)

【第2部 出席者(所属は2024年度調査時。敬称略、五十音順)】

(総体スタッフ)

- 富永美千代(江戸川区総合体育館)
- 原満梨絵(〃)
- 山田勝之(〃)

(専門職)

- 佐々木ゆみ(東京都障害者スポーツ協会)
- 屋敷可奈恵(〃)

(ファシリテーター／事務局)

- 小淵和也(笹川スポーツ財団)

【第1部】

1) 東京都障害者総合スポーツセンターでのプールプログラム(第1回／第2回)

①施設面

(参加者)

- ・ 更衣室の着替えるスペースに余裕があった。
- ・ 濡れたままプールに入れる車いすがあり、移動が楽だった。
- ・ 車いすに乗ったまま入れるトイレが至る所にあり、安心できた。
- ・ 障害者専用のスポーツセンターがあることを知らなかった。来てみて、これほど素晴らしいとは思わなかった。(親として)、今後、子どもがひとりで通えるようになってもらえると良い。
- ・ 子どもが成長して身体が大きくなった時も、着替えるスペースが広いとありがたい。
- ・ プールサイドが一般のプールと比べて一段高いので入水しやすかった。
- ・ 採暖室があったのでプールから出た後に身体が冷えずに良かった。
- ・ 更衣室にはフルフラットの車いすのまま移動可能なスペースがあり、着替えはできそうだった。
- ・ 江戸川区から北区まで距離があり、移動中に子どもに緊張が入ってしまうので、ここでのプール参加は現実的に難しい。

(専門職)

- ・ プール用の車いすがあることや採暖室があることは、もっと周知をするべきだった。
- ・ 多くの人に、この場所について知ってもらう努力が必要と感じた。

②プログラム内容

(参加者)

- ・ 学校だとほかの生徒もいるのでプールに入れても 10~20 分程度。ここまで長い時間(40~60 分)プールに入ることはなかったので非常に楽しかった。
- ・ プールの授業は、入っている時間が短く、“水に浸かっている”感覚であったが、このプールプログラムでは、自分の手で前に進めた、“泳げた”感覚をはじめて味わえた。泳いだ満足感が得られて貴重な体験だった。その後、学校のプールの授業でもはじめて泳ぐ感覚が得られた。

(専門職)

- ・ このプールプログラムをきっかけに泳ぐ感覚を習得できて、学校でも体現できたのは非常にうれしい報告。この仕事をしていて本当に良かったと思えた。話を聞いて本当に感極まっている。
- ・ 子どもたちには、いろいろな可能性があると思うので、さらに多くの選択肢を提供していきたい。
- ・ 専門職の役割として、多くの選択肢を提供し、好きなことをやってもらいたいと思っている。自信を持ってもらい、日常生活にもつながるようになるとうれしい。それが専門職のやりがいである。
- ・ こうした座談会に参加する機会がなく、本音を聞くことがあまりないので、教室終了後は参加者のことを毎回心配していた。「泳げてうれしかった」との声を聞けたのは指導者冥利に尽きる。

2) 江戸川区総合体育館でのプールプログラム(第4回／第8回)

①施設面

(参加者)

- ・ 更衣室の着替えるスペース、座るスペースが若干狭かった。
- ・ 第8回で作ってもらった着替えるスペース(採暖室を更衣室として代替)は、広々としていて、ゆったりと着替えることができた。
- ・ 段差でスタッフが車いすをささえてくれたが、角度が急で身体が傾くのが不安だった。
- ・ 段差のたびにスタッフにささえてもらったが、その間、スタッフに時間を割いてもらうことになるので、親としては心苦しい気持ちになった。

- 複数のスタッフが常にサポートできる体制よりも、簡易でも構わないので、カーテンやシャワーをプールサイドにつけてもらったほうが気は楽である。
- 更衣室は完璧を求めるすくても良いので、気兼ねなく自分のタイミングで着替えられるのが良い。簡易的な長いベンチを用意してもらえるだけでもありがたい。
- プール用車いすでは身体を固定するベルトが1本だけだった。体幹が弱いので1本で充分か不安だった。
- 1回目のプール(第4回)と2回目のプール(第8回)で、スタッフだけでなく、ハード面でも改善してくれた。採暖室を更衣室に変更したり、随所に工夫をしてくれてありがたかった。
- 更衣室のベンチが硬かったので、クッション性のあるものを敷いてもらえると良かった。柔らかすぎると身体が倒れてしまうので調整が難しい。下半身の感覚がないため余計に不安になる。
- 顔が濡れるのが怖いので天井から出てくるシャワーは苦手だった。
- スロープから車いすで直接プールに入る体験がはじめてだったので怖かった。
- 身体を温めるための簡易プールをプールサイドに用意してくれた。プールで冷えた身体を温めてくれ非常に気持ち良かった。

(専門職)

- 1回目のプール(第4回)が終わった後、何度も江戸川区総合体育館のスタッフと打合せを重ねた。隙間風で寒いとの声があったので、養生テープで隙間を塞ぎ対応したり、一緒にアイデアを出し合って改善を重ねた。

②自立に向けて

(参加者)

- 将来を見据えた時、親としてはスポーツを通して、自分ができることを増やして欲しい。スポーツを楽しむのも重要だが、スポーツを通じて、何ができるのか、どういう風にできるのか、どう工夫すれば良いのか、に挑戦できると良い。
- 親としては自立が一番の目標。日頃から自分でできることは何かを考え、自信を得たり、成長するのが理想である。
- 社会に出ることを考えると、親以外の誰かに助けてもらう経験も必要。「手伝ってください」がいえるようになると良い。

(専門職)

- 自分でできることを増やすことを意識している。プールの場合、準備、入水、片付けなどを一貫して考えると、体力をどのように振り分けるのが良いかを自分で考えるようになる。テニスの場合、ボール出しをしてもらって打つだけではなく、自分で打ったボールを拾えるように促す。ボールを拾うための動作を学ぶことも重要である。プールに入る時間やプレーする時間は減少するかもしれないが、一連の流れを体験してもらって、できることを増やしてもらいたいと考えている。

3) 江戸川区内でのスタジオプログラム(第3回／第5回／第6回／第7回)

①プログラム内容

(参加者)

- 普段使わない筋肉を動かすので非常に疲れた。心地良い疲労感だった。
- 水分補給の時間が短かった。重度障害だとペットボトルから直接飲めるわけではない。時間がかかるので、それを想定してタイムテーブルを組んでもらえると良い。

②社会とのふれあい

(参加者)

- 普段は話すこともないご年配の方や、自分とは異なる障害の方と一緒にプログラムに参加して、

コミュニケーションが取れたのは良かった。

- ・先天的な障害であったり、中途障害であったりと、人によって障害が多様であることを学べた。自分たち以外にも障害者がいるってことを改めて認識できる機会になった。
- ・学校中心の生活で児童・生徒以外の人と触れ合う機会がなかったので良い経験になった。社会性を身に着ける上では、学校以外の人と触れ合うのは子どもの成長につながる。
- ・江戸川区に住んでいながら、江戸川区主催のスポーツ教室に参加したことがなかったので、今回のプログラムは非常に新鮮だった。

4) 江戸川区総合体育館スタッフの担当制の効果

(参加者)

- ・場所見知り、人見知りがあるので、回数を重ねて、毎回会って話をするなかで、信頼関係が築かれていった。
- ・最初は顔がこわばっていたが、徐々に自分から指導者に提案できるような関係が築かれていたので、親としてもみていて安心できた。
- ・人の大切さを再認識できた。どのプログラムにも、江戸川区総合体育館のスタッフがいて、毎回会うなかで、徐々に楽しめるようになってきた。

5) 東京都障害者総合スポーツセンターの専門職の存在

(参加者)

- ・安心感が非常に強かった。一人ひとりにしっかりと向き合ってサポートをしてくれた。このプログラムと一緒に楽しむ熱い思いを感じた。
- ・子どものいろいろな変化をみていてくれて、会うたびに小さな変化まで伝えてくれた。前回の内容を踏まえたコメントがもらえたので、そこまで細かくみていてくれたことがうれしかった。
- ・どのようにすれば良くなるかを真剣に考えてくれたのが伝わってきた。情熱が伝わってきたので、顔をみると安心できた。
- ・自分たちに直接関係する情報などいろいろと教えてもらえた。
- ・いつも笑顔で対応してくれたので安心できた。相談も気軽にできた。
- ・障害当事者の悩みごとや困りごとは正確に伝わらないことが多いが、専門職の人には少し状況を伝えただけで、悩みごと、困りごとの本質を瞬時に理解してくれた。こういう人たちに子どもたちを任せれば安心できる。

(専門職)

- ・プログラム内での専門職の役割は2点あった。ひとつは参加者に安心して楽しんでもらうこと、もうひとつが江戸川区総合体育館のスタッフの皆さんに事業の本質を理解してもらい、これをきっかけに継続してプログラムが実施できるためのお手伝いをすることであった。
- ・安心を提供できていたのなら本当に指導者冥利に尽きる。
- ・スポーツの場面に限らず、移動や着替えの際の行動、家族以外の大人への対応など参加者が少しずつ成長している姿をみるのはうれしかった。
- ・個人の可能性を広げるためには、もっとできることはあったかもしれないと改めて感じている。

6) モデルプログラムの振り返り

①他者とのかかわり

(参加者)

- ・今回のプログラムをきっかけに、行政担当者、江戸川区総合体育館のスタッフ、事務局担当者が、訪問リハビリテーションや医療リハビリテーションの現場をみたいと実際にきてくれて、子どもの状況を知ろうとしてくれたのはうれしかった。

- ・ 参加者それぞれの状況を理解し、どうすればできるのかを真剣に考えてくれたことがありがたかった。
- ・ 学校以外の施設でスポーツを経験できたのは、卒業後の人生のほうが長いことを考えると非常に有意義であったと思う。
- ・ 将来、自立していくにあたって、他人とコミュニケーションを取らずに生活するのは難しいわけで、学生時代に、生徒以外の人とコミュニケーションをとる機会が得られたのは、かけがえのない経験になった。
- ・ 看護師さんがいてくれたことで体調面の相談もできた。
- ・ パラスポアンバサダーを幼少期から知っていた。今回再会し、改めて人との出会いが財産になると感じた。成長を知ってもらい、声をかけてもらえるのはうれしい。

②自立・自信

(参加者)

- ・ 自身ができることを多く知ることができたはず。普段、親がみることのない姿をみることができて良かった。
- ・ 生まれてはじめて、水に浸かるのではなく、“泳ぐ”経験ができたのは子どもの自信につながる。親としては感動しかなかった。
- ・ さまざまな可能性を確認できたので、今後は他競技に挑戦したい。

③今後

(参加者)

- ・ 施設ネットワーク検討会議の時、現状を泣きながら訴えたことを思い出す。2年後に、こうしてプログラムを終えることができ、実際に成果がみえて感慨深い。江戸川区以外にも、このような取り組みが広がってもらうことを願っている。
- ・ 卒業後のスポーツ機会として、こうした環境が用意されているのはありがたいので、機会が増えてくることを願っている。



江戸川区モデルプログラム
参加親子4組による座談会

【第2部】

1) 東京都障害者総合スポーツセンターでのプールプログラム(第1回／第2回)

①施設面

(総体スタッフ)

- ・ 障害者専用のスポーツ施設なので、施設の至るところで障害者への配慮があり、大いに参考になった。
- ・ 更衣室が広く、着替えるには十分のスペースがあった。頭のなかで江戸川区総合体育館に置き換えながら、課題として持ち帰った。
- ・ プールサイドの滑りやすい部分にシートを敷いていた。工夫をすれば、江戸川区総合体育館でも対応可能だと感じた。

②プログラム内容

(総体スタッフ)

- ・ 参加者へのインテーク(初回相談)が充実していたのが印象的だった。
- ・ 参加者への配慮点、対応方法など、プールプログラムを一緒に行う関係者間での情報共有が徹底されていた。
- ・ ひとりで動けない参加者、発語が難しい参加者がいて、その人の思いをどう感じ取るかに興味があった。専門職は、顔色や肌の感覚、保護者へのヒアリングなど、本人との会話以外のコミュニケーションにも気を遣っていた。

(専門職)

- ・ 障害の程度が最重度と重度では状況がまったく異なる。たとえば、自分で少し身体をコントロールできる人とまったくできない人では異なるし、発語があるかないかでも変わってくる。一人ひとりで状況は異なる。経験でカバーできる部分もあるが、保護者に状況を聞く必要も当然ある。プロセスを間違えずに進めることが大切である。
- ・ 江戸川区総合体育館のスタッフに、東京都障害者総合スポーツセンターの施設をみてもらったのはイメージを膨らませる意味で良かった。実際にきて施設をみると、情報だけ知っているのとではまったく異なると思う。
- ・ 肌の質感、身体の緊張などは、動画をみたり、話を聞いただけではわからない。肌に直接触れたり、腕の持ち方を少し変えるだけで動きが変わってきたり、そのような変化を実際にプールに入ってみられたのは貴重な機会だった。

③学び

(総体スタッフ)

- ・ 一緒にプールに入っている保護者への配慮も素晴らしかった。プールのなかで、どうすれば本人が気持ちよく楽しめるのかを、保護者の気持ちを考慮した上で伝えていた。専門職と同じ目線でプールに入らないと感じられなかつたことで、非常に大きな収穫だった。
- ・ 参加者の体調にあわせて、プールの入退水を行っていた。早くプールから上がるがダメでもなく、遅れて参加することがダメなわけでもない。参加者が楽しめる適切な時間、身体が冷える前にプールから上がるなど、プログラム構成と参加者それぞれへの配慮が素晴らしかった。
- ・ 発語がなく意思疎通が難しい人の場合、本当に自分がその人の意思を感じ取ることができるかは自信が持てなかつた。
- ・ 体幹がない子どもを抱っこする経験はなかつたので経験としては良かったが、実際に自分が指導するとなると、もっと経験をしていかないと怖い。

④対応力

(専門職)

- 自信がない、怖い、との感想は非常にポジティブな反応と捉えている。今回の経験だけで完璧な指導ができるようになるのは現実的に難しい。怖いと思うのは指導に真摯に向き合っている証拠。どこまでがでけて、どこからができないかを認識すること、怖い原因がどこにあるのかを分析し理解することが重要。このプロセスがないと、重度障害者への指導はできない。
- 身体から緊張が抜ける瞬間、逆に怖がって緊張が高まった瞬間、集中力が上がった瞬間など、発語がないからこそ、その瞬間と一緒に感じてもらう、触って確認してもらう経験は非常に大きい。こうしたプロセスのなかで、専門職と施設スタッフでの共通言語も増えてきて、より精度が上がるはず。
- 指導の引き出しを用意して臨むのは重要。その場では使わなくても、参加者の安全安心を担保するためには必要なスキルや経験である。その場の雰囲気や参加者によって提供できる引き出しは変わる。
- 安全安心は最低限のラインなので慎重になるのは理解できる。多くのシミュレーションを行い、多くの引き出しを準備してから現場で指導するのは思っている以上に難しい。
- 事前にメニューを作っていても、当日メニュー通りいかないことは多々ある。「これができないからこうしよう」ではなく、「これができそうだから、これをやろう！」と常に考えておくことで、その都度、メニューがマイナーチェンジして提供されていく。「これならできそう」「これならもうちょっとできるかな」とポジティブな考え方方が大切。

2) 江戸川区総合体育館でのプールプログラム(第4回／第8回)

①プログラム内容

(総体スタッフ)

- プログラム内容も、事前に組み立てた内容を、予行演習として施設スタッフと行うなかで、さらに意見が出てきて、当日まで施設スタッフみんなで考えて準備に進むことができた。

(専門職)

- 指導者同士の情報共有は参加者の情報共有もあるが、各指導者の得手不得手を含めたりスクのすり合わせの意味もある。
- プログラムを通して、きてくれた参加者に何を持って帰ってもらうか？いかに楽しんでもらえるか？またきたいと思ってもらえるか？を常々考えていた。ベクトルが同じ方向を向いていたからこそ、さまざまな工夫やアイデアが出て、声掛けがあって、内容のブラッシュアップに向けて活発な意見交換が行われたと思う。障害のある人は、不安な気持ちで施設を訪れる。迎える側に不安があると、それが一瞬にして伝わってしまう。今回、施設スタッフ全員が手を広げ、笑顔で迎え入れてくれる環境を作ってくれたので本当に良かったと思う。こうした仲間が江戸川区総合体育館にいるのが分かったことだけでも、専門職としては心強い。

②学び

(総体スタッフ)

- 参加親子がすべて同じメニューである必要はなかったので、各自の状況にあわせた。寒くないように、準備ができた参加者から準備体操をして入水していった。退水時、身体が冷えそうな人は早めに出て、もう少し頑張りたい人は長めにプールに入つてもらった。プールを最後まで楽しんでもらえるようなメニューを作ったので、臨機応変に対応できた。
- 江戸川区総合体育館のプールでできる内容について、第1フェーズで習ったことや経験したことを反映しながら、スタッフ間で意見交換を行い作成した。

- ・ 参加者の健康状態や水への慣れ具合などに応じて指導内容をすり合わせて提供できたのは良かった。
- ・ 指導者だけでなくサポートするスタッフ含めて、全員が同じ気持ちでプログラムを提供できたのは、今回の大きな収穫。参加者、保護者にばかり気を取られてもダメだと感じた。

(専門職)

- ・ 指導者の不安感は、参加者に伝わる。プールだと、直接、肌が触れるのでより伝わりやすい。

③チームワーク

(総体スタッフ)

- ・ 自分ひとりで考えるよりも、多くの人と考える方がさまざまな視点で意見が出て議論できる。今回は改めてそれを認識できた。
- ・ 更衣室の改善策ひとつをとってもさまざまな視点から議論ができたので改善内容の精度が上がった。
- ・ 施設スタッフ同士の信頼関係が構築できた。良い雰囲気でプログラムを提供できたのも、それが関係していると思う。他地域に展開するには施設スタッフの信頼関係は非常に重要なと思う。

(専門職)

- ・ 指導者の実績はさまざまなので、チームワークが非常に重要。現場では起こりうるすべてのことを想定して準備して臨む。準備万全でも想定外のことは起こる。だからこそ、指導者間のチームワーク、信頼関係は非常に重要なになる。
- ・ 主指導と指導補助に能力的な差があるわけではなく視点が異なるだけ。主指導が全体マネージメントしつつ、指導補助の性格や力量などを把握して調整する。指導補助は、水泳指導の能力はもちろんだが、参加者の障害特性を理解して、個別の指導に集中する。複数の参加者が同時にプールのなかで活動する場合、主指導、指導補助は役割分担を意識しつつ、チームワークが非常に重要なになる。
- ・ 第8回は専門職の出番がないほど信頼して任せられた。積み上げた信頼関係が形になった最終回だった。

3) プール指導

(総体スタッフ)

- ・ 会話以外のコミュニケーションが重要だと感じた。たとえば、身体の硬さ、柔らかさ。水に入つて怖いのかな？緊張しているのかな？皮膚がちょっと硬くなる感じが分かった。徐々に雰囲気に慣れてくると力が抜け、水温に慣れてくると皮膚が手に吸い付くような感覚になった。体重を指導者に預けてくれるようになる。微妙な変化だが変わるのが分かる。

(専門職)

- ・ 行って触って、怖さを感じる。このプロセスがあつてはじめて次のステップに進める。簡単に重度、最重度の障害者の指導ができるわけではない。指導の奥深さ、難易度の高さを認識してもらえたのは非常にありがたい。

4) チーム内での意思統一

①第1フェーズ

(総体スタッフ)

- ・ プログラム開始当初は、一部のスタッフだけが熱量をもって取り組んでいたが、プログラムを進めていくなかでスタッフの意識も変化して、積極的にかかわるスタッフが徐々に増えてきた。
- ・ 重度障害者の受入がはじめてで、スタッフ間でも不安のある人は多く、プログラムへの理解度もバラバラだった。

- ・ 第1フェーズを体験して、難易度の高さを実感できた。
- ・ 一緒にプールに入り触れることで指導の機微を感じることができた。モデルプログラムで求められている指導のレベルの高さを実感した。スタッフの共通認識として危機感が大きくなつた。
- ・ 第1フェーズの序盤は1~2名が東京都障害者総合スポーツセンターの見学・体験に行っていたが、終盤にはスタッフ自らが行きたいと立候補して、2~3名が見学・体験するようになった。

②第2フェーズ

(総体スタッフ)

- ・ 安全安心のプログラムを提供して楽しんで帰ってもらう、と実施期間中ずっと言い続けてきた。障害の有無にかかわらず、施設にきてもらった人に、プールって楽しいよね、泳ぐって楽しいよね、江戸川区総合体育館にきて楽しかったね、またきたいね、と思ってもらうにはどうしたら良いか？を常々考えている。そのためには、自分はどういう役割を果たすべきか、自問自答しながら、チームで考えてきた。最終回に、それが結実した。
- ・ 主指導、指導補助、監視で役割を分担した。第1フェーズを経て、担当割を微修正。総体プール(第4回)を経て、再度、担当割を修正した。

(専門職)

- ・ 最終回に向けて、一枚岩になって、同じ方向にベクトルをもっていく難しさを実感できた。施設運営の意味では同じ立場であり、尊敬している。本当に学ぶことばかりだった。
- ・ スポーツ施設職員の視点でみると、スポーツ活動を支援する、スポーツを通じて何かを伝えることについて参考になることばかりだった。
- ・ 目の前に当事者がいる環境で一緒に指導できたのは良かった。東京都障害者総合スポーツセンターでは、これだけ多くの障害者がスポーツをしていることをみてもらえたり、こういう障害があってもスポーツできることもみてもらったと思う。自分事化してもらう良いきっかけになったと思う。
- ・ 利用者に楽しんでもらう、またきたいと思ってもらうのは、どのスポーツ施設でも共通だと感じた。
- ・ 回を重ねるごとにスタッフの変化を感じていた。
- ・ 共通の目的、共通の思いがあるので、ネットワークがつながったと思うし、だからこそ、質問してもらったし、自分たちからも聞くことがあった。相互の関係があるからこそネットワークはつながるものなので、それを実感できた。

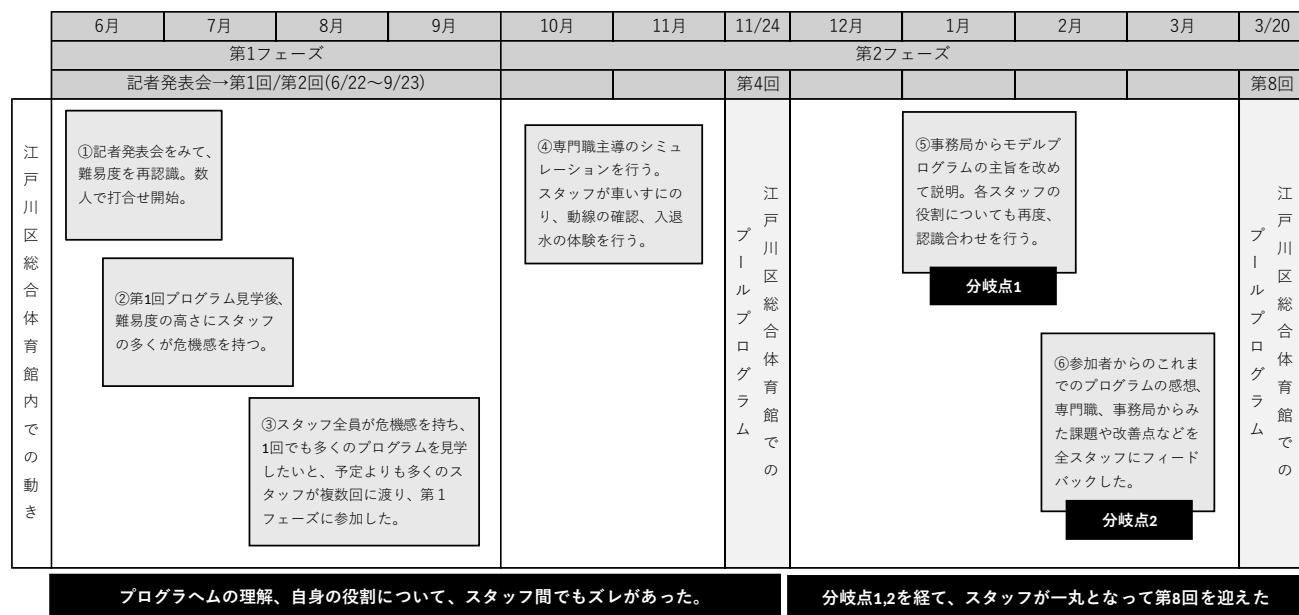
③2つの分岐点(図表3-19)

(総体スタッフ)

- ・ **【分岐点1】**プログラムの途中で、このプログラムの意義、各スタッフの役割の再認識をしてもらいたくて、事務局に依頼して、趣旨の全体共有、このプログラムで求められていることの再確認の機会を設けてもらった。主指導も指導補助も監視もスタッフ全員が重要である、全員が役割を全うしてはじめて、このプログラムは成功するのを、あの時点で確認できた。あそこが分岐点(1回目)だった。事務局からのフィードバックに対して、スタッフそれぞれが対応策を考えるようになった。かかわり方が分からなかったスタッフも積極的にサポートするようになった。事務局とのやり取りを経て、自分がかかる意義、何をやれば良いのかを再認識でき、大きな自信を得られた。
- ・ **【分岐点2】**第8回開催の2か月前に、事務局よりこれまでの振り返りを含めて、厳しい指摘をされた。その通りだと思ったし、このままでは第8回は迎えられないと危機感が大きくなつた。スタッフ間で何度も話し合った。主指導、指導補助、監視と立場が異なり、みている視点も異なるので議論は白熱した。自分たちが水泳指導の専門家であることには自信を持つべきだと

思った。基本に返って水泳プログラムを考えた。その上で、重度障害者への指導で分からぬこと、できないことを整理した。そうすると、事務局からの厳しい指摘に対する解決策、対応策もみえてきた。ここが2回目の分岐点だった。

図表 3-19 江戸川区総合体育館スタッフの変化



出典：座談会内容をもとに作成

5) 江戸川区でのスタジオプログラムの振り返り(第3回／第5回／第6回／第7回)

(総体スタッフ)

- その場にいる全員が何をすれば楽しんでもらえるかを常に考えながらやっている。楽しいけれど、身体に刺激を入れないといけないし、身体に効いたと感じてもらいたい。
- 障害者向けのプログラムではあるが、同行している保護者にも効果のあるものを提供したいと考えている。もちろん配慮はするが、障害は気にせず、動かしにくい部分があれば代替案を提供して楽しんでもらおうと思った。
- 子どもたちからすれば、保護者が苦戦している姿を日常生活ではあまりみることがない。すぐ横で知らない大人が自分と一緒に楽しんでいる体験をすることもない。そういう意味でも、この光景を提供できたことは誇りに思う。

(専門職)

- 都度みてきたが、本当に指導がプロフェッショナルだった。毎回、当事者、保護者、我々も含めて巻き込んで楽しんで帰ってもらう、を体現していた。
- 知らない大人、家族や学校以外の関係者と接し、子どもたちには社会性を育むきっかけになったと思う。

6) 東京都障害者総合スポーツセンターの職員(専門職)の存在

(総体スタッフ)

- 今後、別のプログラムをはじめる際にも助言をもらいたい。我々も江戸川区総合体育館では指導者であり先生。「先生の先生」が専門職。安心感しかなかった。何かあったらフォローしてもらえるし、ささえてもらった。何もなかつたら大丈夫だよとの目線で寄り添ってもらった。

7) モデルプログラムの振り返り

(総体スタッフ)

- ・ プログラムを通して、スタッフ全体が成長できた。お互いの役割が整理できだし、細やかな部分の配慮がお互いにできるようになったし、普段の教室もやりやすくなった。プログラムのなかで糸余曲折して、互いの考えをぶつけ合うことができたから、より一層チームワークが良くなつた。
- ・ これで終わりではない。ここからが本当のスタートである。
- ・ 今後の継続が重要。新しく入ってくるメンバーにもこの経験、技術は伝えていくことで継続につながる。江戸川区総合体育館にはその責任があると思っているので、一過性のプログラムにならないように、スタッフが一丸となって対応していく。
- ・ 行政のかかわりが非常に重要だと感じた。後方支援、側面支援を至る所でしてもらって、本当に心強かった。行政の理解なくして、事業は進まないと実感した。

(専門職)

- ・ 行政担当者が毎回、プログラムに顔を出してもらったのはありがたかった。行政担当者の熱意で、地域の障害者スポーツ環境は大いに変わると感じた。
- ・ 専門職として自分たちが知っていることをすべて伝えるのが良いのか迷ったが、施設スタッフの頑張りをみていたら、そうじゃないと感じた。プログラム以外でもお互いにやり取りをしていて、そのなかでの電話やメール、立ち話など、至る所でのコミュニケーションがあつて、都度、お互いが知りたいこと、伝えたいことを本音で共有できたのが良かった。相互の意見交換で学びが多かった。

2. 北九州市の障害者スポーツ振興における施設ネットワーク実践研究

(1) 北九州市モデルプログラム概要(2024年度)

モデルプログラムの目的は以下の通りである。

- 1) サテライト施設を会場に地域のその他社会資源の利用者に巡回スポーツ教室に参加してもらう。
- 2) アレアスが仲介役となり、SKETと地域の当事者がつながる機会を提供する。
- 3) SKETがハブ施設、サテライト施設、地域のその他社会資源の施設をつなぐ潤滑油となり、地域のその他社会資源の施設においてSKET主導の指導につなげる。

3つの行政区(小倉南区、八幡東区、門司区)の主指導を北九州市障害者スポーツボランティアの会(SKET)の会員から選定した(図表3-20)。モデルプログラムの実施概要は図表3-21にまとめた。

図表3-20 北九州市モデルプログラム 主指導者一覧(敬称略)

行政区	所属	氏名
小倉南区	北九州市障害者スポーツボランティアの会 (SKET)	小野真子
八幡東区	〃	松浦道子
門司区	〃	矢野敏弘

図表 3-21 北九州市モデルプログラム実施概要

グループ	フェーズ	回数	月日	時間	参加者数	会場	主指導	指導補助
小倉南区 グループ	第1 フェーズ	第1回	2024/6/7(金)	10:30~11:30	45人	城野体育館	SKET 小野真子	・アレアス職員（専門職） ・SKETスタッフ
		第2回	2024/10/4(金)	10:30~11:30	41人	城野体育館		・アレアス職員（専門職） ・SKETスタッフ
	第2 フェーズ	第3回	2024/12/6(金)	10:20~11:20	20人	障害福祉サービス事業所リーシュ		・アレアス職員（専門職） ・SKETスタッフ
八幡東区 グループ	第1 フェーズ	第1回	2024/7/12(金)	13:30~14:30	9人	八幡東体育館	SKET 松浦道子	・アレアス職員（専門職） ・SKETスタッフ
		第3回	2025/2/14(金)	13:30~14:30	16人	八幡東体育館		・アレアス職員（専門職） ・SKETスタッフ
	第2 フェーズ	第2回	2024/10/21(月)	13:30~14:45	8人	多機能型事業所 ワンステップ		・アレアス職員（専門職） ・SKETスタッフ
門司区 グループ	第1 フェーズ	第1回	2024/8/5(月)	13:00~14:00	13人	門司体育館	SKET 矢野敏弘	・アレアス職員（専門職） ・SKETスタッフ
		第2回	2024/10/7(月)	13:30~14:30	15人	門司体育館		・アレアス職員（専門職） ・SKETスタッフ
		第4回	2025/2/3(月)	13:30~14:30	14人	門司体育館		・アレアス職員（専門職） ・SKETスタッフ
	第2 フェーズ	第3回	2024/12/13(金)	13:15~14:15	16人	スマイル門司		・アレアス職員（専門職） ・SKETスタッフ

1) 小倉南区グループ

第1フェーズから第2フェーズへの地域移行の概要は図表3-22の通りである。第1フェーズの第1回、第2回は、サテライト施設である城野体育館で実施、第2フェーズの第3回は地域のその他社会資源である障害福祉サービス事業所リーシュで実施した。

図表3-22 北九州市(小倉南区)モデルプログラムにおける地域移行の概要

第1フェーズ		第2フェーズ	
実施回	第1回／第2回	実施回	第3回
施設形態	サテライト施設	施設形態	地域のその他社会資源
会場	城野体育館	会場	障害福祉サービス事業所リーシュ

①参加者

小倉南区の障害福祉事業所(フラワー木町、障害福祉サービス事業所リーシュ、ファインズ ムービング)の利用者と各事業所職員と一緒に参加した。

②プログラムの活用

北九州市障害者スポーツセンター・アレアスが実施している「巡回スポーツ教室」を活用した。従来の教室は、主指導を専門職であるアレアス職員が行っていたが、本プログラムの主指導は北九州市障害者スポーツボランティアの会(SKET)登録の指導者とした。プログラム内容は、事業所職員と相談して決定した。

③指導体制

主指導のSKETスタッフは、これまでのSKETでの活動内容、およびプログラム終了後の地域での活動可能性を考慮してアレアスの専門職が選定した。指導補助のSKETスタッフは、SKET登録者から募った。指導補助のアレアス職員(専門職)は、従来の「巡回スポーツ教室」で主指導の経験がある職員を中心に選定した。アレアス所長が全プログラムに参加して、提供するプログラムの安全管理につとめた。

④事前ヒアリングの実施

第2フェーズを実施するにあたり、アレアス所長と主指導のSKETスタッフが事前に障害福祉サービス事業所リーシュを訪れて利用できる道具や機材の確認、安全に活動できるように家具移動などを依頼した。加えて、参加予定者の状況や特徴について、事業所職員に確認した。

⑤担当制の導入

利用者との信頼関係の構築、安全・安心を確保する観点から、主指導のSKETスタッフは、第1フェーズ、第2フェーズと変更せずに実施した。

2) 八幡東区グループ

第1フェーズから第2フェーズへの地域移行の概要は図表3-23の通りである。第1フェーズの第1回、第3回はサテライト施設である八幡東体育館で実施、第2フェーズの第2回は地域のその他社会資源である多機能型事業所ワンステップで実施した。

図表3-23 北九州市(八幡東区)モデルプログラムにおける地域移行の概要

第1フェーズ		第2フェーズ	
実施回	第1回／第3回	実施回	第2回
施設形態	サテライト施設	施設形態	地域のその他社会資源
会場	八幡東体育館	会場	多機能型事業所ワンステップ

①参加者

八幡東区の障害福祉事業所(多機能型事業所ワンステップ、アベック戸畠)の利用者と各事業所職員が一緒に参加した。

②プログラムの活用

北九州市障害者スポーツセンター アレアスが実施している「巡回スポーツ教室」を活用した。従来の教室は、主指導を専門職であるアレアス職員が行っていたが、本プログラムの主指導は北九州市障害者スポーツボランティアの会(SKET)登録の指導者とした。プログラム内容は、事業所職員と相談して決定した。

③指導体制

主指導のSKETスタッフは、これまでのSKETでの活動内容、およびプログラム終了後の地域での活動可能性を考慮してアレアスの専門職が選定した。指導補助のSKETスタッフは、SKET登録者から募った。指導補助のアレアス職員(専門職)は、従来の「巡回スポーツ教室」で主指導の経験がある職員を中心に選定した。アレアス所長が全プログラムに参加して、提供するプログラムの安全管理につとめた。

④事前ヒアリングの実施

第2フェーズを実施するにあたり、アレアス所長と主指導のSKETスタッフが事前に多機能型事業所ワンステップを訪れて利用できる道具や機材の確認、安全に活動できるように家具移動などを依頼した。加えて、参加予定者の状況や特徴について、事業所職員に確認した。

⑤担当制の導入

利用者との信頼関係の構築、安全・安心を確保する観点から、主指導のSKETスタッフは、第1フェーズ、第2フェーズと変更せずに実施した。

3) 門司区グループ

第1フェーズから第2フェーズへの地域移行の概要は図表3-24の通りである。第1フェーズの第1回、第2回、第4回はサテライト施設である門司体育館で実施、第2フェーズの第3回は地域のその他社会資源であるスマイル門司で実施した。

図表3-24 北九州市(門司区)モデルプログラムにおける地域移行の概要

第1フェーズ		第2フェーズ	
実施回	第1回／第2回／第4回	実施回	第3回
施設形態	サテライト施設	施設形態	地域のその他社会資源
会場	門司体育館	会場	スマイル門司

①参加者

門司区の障害福祉事業所(スマイル門司)の利用者と事業所職員が一緒に参加した。

②プログラムの活用

北九州市障害者スポーツセンター アレアスが実施している「巡回スポーツ教室」を活用した。従来の教室は、主指導を専門職であるアレアス職員が行っていたが、本プログラムの主指導は北九州市障害者スポーツボランティアの会(SKET)指導者とした。プログラム内容は事業所職員と相談して決定した。

③指導体制

主指導のSKETスタッフは、これまでのSKETでの活動内容、およびプログラム終了後の地域での活動可能性を考慮してアレアスの専門職が選定した。指導補助のSKETスタッフは、SKET登録者から募った。指導補助のアレアス職員(専門職)は、従来の「巡回スポーツ教室」で主指導の経験がある職員を中心に選定した。アレアス所長が全プログラムに参加して、提供するプログラムの安全管理につとめた。

④事前ヒアリングの実施

第2フェーズを実施するにあたり、アレアス所長と主指導のSKETスタッフが事前にスマイル門司を訪れて利用できる道具や機材の確認、安全に活動できるように家具移動などを依頼した。加えて、参加予定者の状況や特徴について、事業所職員に確認した。

⑤担当制の導入

利用者との信頼関係の構築、安全・安心を確保する観点から、主指導のSKETスタッフは、第1フェーズ、第2フェーズと変更せずに実施した。

(2) 北九州市モデルプログラム詳細(2024年度)

北九州市モデルプログラムの詳細を各行政区で実施日順にまとめた。

小倉南区では、サテライト施設である城野体育館で行われた第1フェーズを図表3-25、3-26、地域のその他社会資源である障害福祉サービス事業所リーシュで行われた第2フェーズを図表3-27にまとめた。

八幡東区では、サテライト施設である八幡東体育館で行われた第1フェーズを図表3-28、3-30、地域のその他社会資源である多機能型事業所ワンステップで行われた第2フェーズを図表3-29にまとめた。

門司区では、サテライト施設である門司体育館で行われた第1フェーズを図表3-31、3-32、3-34、地域のその他社会資源であるスマイル門司で行われた第2フェーズを図表3-33にまとめた。

【小倉南区グループにおける目標】

- ①小倉南区を中心とした障害者にスポーツ・レクリエーション活動に親しむ機会を提供する。
- ②対象事業所で日常的にスポーツ・レクリエーション活動に取り組めるプログラムを提供する。

図表 3-25 北九州市(小倉南区)モデルプログラム詳細(第1回)

対象地区	小倉南区
施設ネットワーク	【ハブ施設】北九州市障害者スポーツセンター アレアス
	【サテライト施設】城野体育館
	【地域のその他社会資源】障害福祉サービス事業所リーシュ、フラワーモ木、ファインズ ムービング
実施回数	第1回
実施日	2024年6月7日 (金)
実施時間	10:30~11:30
実施会場	城野体育館
メイン指導者	SKET: 小野真子
サポートスタッフ	SKET: 4名 / アレアス: 3名
参加人数	45名
参加内訳	障害者: 34名 / 事業所職員: 11名 (3施設合計)
障害種別内訳	知的障害: 31名 / 精神障害: 3名
年齢区分	18~64歳: 34名
居住地区	門司区: 1名 / 小倉北区: 11名 / 小倉南区: 21名 / 八幡東区: 1名
実施内容	<ul style="list-style-type: none"> ・ラジオ体操 ・玉入れ ・休憩 ・卓球バレー ・整理体操
備考	玉入れは、①各施設2列に並んで2球ずつ玉入れ、②施設ごとに、全ての紅白玉を5つのゴールに入れ、時間を競った (2回ずつ実施)。

図表 3-26 北九州市(小倉南区)モデルプログラム詳細(第2回)

対象地区	小倉南区
施設ネットワーク	【ハブ施設】北九州市障害者スポーツセンター アレアス
	【サテライト施設】城野体育館
	【地域のその他社会資源】障害福祉サービス事業所リーシュ、フラワー木町、ファインズ ムービング
実施回数	第2回
実施日	2024年10月4日 (金)
実施時間	10:30~11:30
実施会場	城野体育館
メイン指導者	SKET: 小野真子
サポートスタッフ	SKET: 3名 / アレアス: 3名
参加人数	41名
参加内訳	障害者: 32名 / 事業所職員: 9名 (3施設合計)
障害種別内訳	肢体不自由: 1名 / 知的障害: 30名 / 精神障害: 1名
年齢区分	18~64歳: 32名
居住地区	門司区: 1名 / 小倉北区: 7名 / 小倉南区: 22名 / 八幡東区1名 / 北九州市外: 1名
実施内容	<ul style="list-style-type: none"> ・ラジオ体操、ストレッチ ・玉入れ ・休憩 ・ボール遊び ・フライングディスク ・整理体操
備考	<p>ラジオ体操・ストレッチは、新聞で作った棒を使っての体操・ストレッチを行った。</p> <p>ボール遊びは、2人1組でタオルにボールを乗せて実施後、1列になりボールを後ろに手渡しで回した。</p> <p>フライングディスクは、コーンを狙って当てるようにした。</p> <p>参加施設で人数にバラつきがあったため、合同でチームを作り競技を行ったが、スムーズに行えた。</p>

図表 3-27 北九州市(小倉南区)モデルプログラム詳細(第3回)

対象地区	小倉南区
施設ネットワーク	【ハブ施設】北九州市障害者スポーツセンター アレアス
	【サテライト施設】城野体育館
	【地域のその他社会資源】障害福祉サービス事業所リーシュ、フラワー木町、ファインズ ムービング
実施回数	第3回
実施日	2024年12月6日 (金)
実施時間	10:20~11:20
実施会場	障害福祉サービス事業所リーシュ
メイン指導者	SKET: 小野真子
サポートスタッフ	アレアス: 2名
参加人数	20名
参加内訳	障害者: 16名 / 事業所職員: 4名 (リーシュのみ参加)
障害種別内訳	知的障害: 16名
年齢区分	18~64歳: 16名
居住地区	門司区: 1名 / 小倉南区: 14名 / 八幡東区: 1名
実施内容	<ul style="list-style-type: none"> ・準備体操、ストレッチ ・休憩 ・ボール渡し ・ラダーゲッター ・整理体操
備考	<p>ボール渡しは、様々な渡し方で2チームに分かれて速さを競った。</p> <p>ラダーゲッターは、チーム対抗戦で実施した。1人3回まで順番に投げ、合計2回戦まで行った。</p>



北九州市モデルプログラム
(小倉南区) @ 城野体育館



北九州市モデルプログラム
(小倉南区)
@ 障害福祉サービス事業所リーシュ

【八幡東区グループにおける目標】

- ①八幡東区を中心とした障害者にスポーツ・レクリエーション活動に親しむ機会を提供する。
- ②対象事業所で日常的にスポーツ・レクリエーション活動に取り組めるプログラムを提供する。

図表 3-28 北九州市(八幡東区)モデルプログラム詳細(第1回)

対象地区	八幡東区
施設ネットワーク	<p>【ハブ施設】北九州市障害者スポーツセンター アレアス</p> <p>【サテライト施設】八幡東体育館</p> <p>【地域のその他社会資源】多機能型事業所ワンステップ、アベック戸畠</p>
実施回数	第1回
実施日	2024年7月12日 (金)
実施時間	13:30~14:30
実施会場	八幡東体育館
メイン指導者	SKET: 松浦道子
サポートスタッフ	SKET: 3名 / アレアス: 3名
参加人数	9名
参加内訳	障害者: 6名 / 事業所職員: 3名
障害種別内訳	知的障害: 6名 ※車いす (+装具) 参加者: 2名
年齢区分	18~64歳: 6名
居住地区	小倉南区: 1名 / 若松区: 1名 / 八幡東区: 1名 / 八幡西区: 3名
実施内容	<ul style="list-style-type: none"> ・ラジオ体操 ・ボッチャ ・休憩 ・フライングディスク ・ディスゲッター ・整理体操
備考	<p>ボッチャは、競技説明後、3対3のチーム戦で2回戦実施した。</p> <p>フライングディスクは、約4mの距離から3枚ずつ投げ、枠に入った枚数をチーム戦で競った。</p> <p>ディスゲッターは、約4mの距離から3枚ずつ投げ、的を射抜いた枚数をチーム戦で競った。</p> <p>空調設備がなく、水分補給に細心の注意を払った。</p>

図表 3-29 北九州市(八幡東区)モデルプログラム詳細(第2回)

対象地区	八幡東区
施設ネットワーク	【ハブ施設】北九州市障害者スポーツセンター アレアス
	【サテライト施設】八幡東体育館
	【地域のその他社会資源】多機能型事業所ワンステップ、アベック戸畠
実施回数	第2回
実施日	2024年10月21日 (月)
実施時間	13:30~14:45
実施会場	多機能型事業所ワンステップ
メイン指導者	SKET: 松浦道子
サポートスタッフ	アレアス: 1名
参加人数	8名
参加内訳	障害者: 5名 / 事業所職員: 3名
障害種別内訳	知的障害: 5名
年齢区分	18~64歳: 5名
居住地区	八幡東区: 5名
実施内容	<p>(第1グループ)</p> <ul style="list-style-type: none"> ラジオ体操 ストレッチ リズム体操 <p>(第2グループ)</p> <ul style="list-style-type: none"> ラジオ体操 ストレッチ リズム体操
備考	同敷地内の2施設で前半、後半に分けて実施した。

図表 3-30 北九州市(八幡東区)モデルプログラム詳細(第3回)

対象地区	八幡東区
施設ネットワーク	【ハブ施設】北九州市障害者スポーツセンター アレアス
	【サテライト施設】八幡東体育館
	【地域のその他社会資源】多機能型事業所ワンステップ、アベック戸畠
実施回数	第3回
実施日	2025年2月14日 (金)
実施時間	13:30~14:30
実施会場	八幡東体育館
メイン指導者	SKET: 松浦道子
サポートスタッフ	SKET: 2名 / アレアス: 3名
参加人数	16名
参加内訳	障害者: 11名 / 事業所職員: 5名
障害種別内訳	知的障害: 11名
年齢区分	18~64歳: 11名
居住地区	八幡東区11名
実施内容	<ul style="list-style-type: none"> ・ラジオ体操 ・館内ウォーキング ・休憩 ・卓球バレー ・ふうせんバレー
備考	場面転換の時間を節約するため、参加者来場前に、卓球バレーとふうせんバレーの会場設営を事前に行った。



北九州市モデルプログラム
(八幡東区) @ 八幡東体育館



北九州市モデルプログラム
(八幡東区)
@ 多機能型事業所ワンステップ

【門司区グループにおける目標】

- ①門司区を中心とした障害者にスポーツ・レクリエーション活動に親しむ機会を提供する。
- ②対象事業所で日常的にスポーツ・レクリエーション活動に取り組めるプログラムを提供する。

図表 3-31 北九州市(門司区)モデルプログラム詳細(第1回)

対象地区	門司区
施設ネットワーク	【ハブ施設】北九州市障害者スポーツセンター アレアス
	【サテライト施設】門司体育館
	【地域のその他社会資源】スマイル門司
実施回数	第1回
実施日	2024年8月5日(月)
実施時間	13:00~14:00
実施会場	門司体育館
メイン指導者	SKET: 矢野敏弘
サポートスタッフ	SKET: 1名 / アレアス: 2名
参加人数	13名
参加内訳	障害者: 10名 / 事業所職員: 3名
障害種別内訳	肢体不自由: 1名 / 精神障害: 9名
年齢区分	18~64歳: 10名
居住地区	門司区: 10名
実施内容	<ul style="list-style-type: none"> ・準備体操 ・ボッチャ (1試合目) ・休憩 ・ボッチャ (2試合目) ・ボッチャ (3試合目)
備考	スマイル門司の利用者がボッチャ大会に出場する予定であるため、大会に向けた練習を兼ねてボッチャを実施した。競技説明後、3名1チームで対戦組み合わせを変えながら、チーム戦を行った。

図表 3-32 北九州市(門司区)モデルプログラム詳細(第2回)

対象地区	門司区
施設ネットワーク	【ハブ施設】北九州市障害者スポーツセンター アレアス
	【サテライト施設】門司体育館
	【地域のその他社会資源】スマイル門司
実施回数	第2回
実施日	2024年10月7日(月)
実施時間	13:30~14:30
実施会場	門司体育館
メイン指導者	SKET: 矢野敏弘
サポートスタッフ	SKET: 1名 / アレアス: 2名
参加人数	15名
参加内訳	障害者: 12名 / 事業所職員: 3名
障害種別内訳	肢体不自由: 1名 / 知的障害: 3名 / 精神障害: 8名
年齢区分	18~64歳: 11名 / 65歳以上: 1名
居住地区	門司区12名
実施内容	<ul style="list-style-type: none"> ・準備体操 ・フライングディスク(ディスクの投げ合い) ・フライングディスク(アキュラシー投てき練習) ・休憩 ・フライングディスク(ディスタンス投てき練習)
備考	スマイル門司の利用者がフライングディスク大会に出場する予定であるため、大会に向けた練習を兼ねて実施した。競技説明後、アキュラシー、ディスタンスの練習をそれぞれ行った。

図表 3-33 北九州市(門司区)モデルプログラム詳細(第3回)

対象地区	門司区
施設ネットワーク	【ハブ施設】北九州市障害者スポーツセンター アレアス
	【サテライト施設】門司体育館
	【地域のその他社会資源】スマイル門司
実施回数	第3回
実施日	2024年12月13日 (金)
実施時間	13:15~14:15
実施会場	スマイル門司
メイン指導者	SKET: 矢野敏弘
サポートスタッフ	アレアス: 4名
参加人数	16名
参加内訳	障害者: 13名 / 事業所職員: 3名
障害種別内訳	肢体不自由: 1名 / 知的障害: 4名 / 精神障害: 8名
年齢区分	18~64歳: 12名 / 65歳以上: 1名
居住地区	門司区13名
実施内容	<ul style="list-style-type: none"> ・準備体操 ・卓球バレー (1試合目) ・休憩 ・卓球バレー (2試合目) ・卓球バレー (3試合目)
備考	普段、集団行動が苦手な利用者も、チームメートと一緒に席に座り、卓球バレーを楽しんだ。試合を重ねるごとに力加減が身に付いてきた。

図表 3-34 北九州市(門司区)モデルプログラム詳細(第4回)

対象地区	門司区
施設ネットワーク	【ハブ施設】北九州市障害者スポーツセンター アレアス
	【サテライト施設】門司体育館
	【地域のその他社会資源】スマイル門司
実施回数	第4回
実施日	2025年2月3日(月)
実施時間	13:30~14:30
実施会場	門司体育館
メイン指導者	SKET: 矢野敏弘
サポートスタッフ	アレアス: 2名
参加人数	14名
参加内訳	障害者: 11名 / 事業所職員: 3名
障害種別内訳	肢体不自由: 1名 / 知的障害: 2名 / 精神障害: 8名
年齢区分	18~64歳: 10名 / 65歳以上: 1名
居住地区	門司区11名
実施内容	<ul style="list-style-type: none"> ・ラジオ体操 ・スクエアボッチャ (1試合目) ・スクエアボッチャ (2試合目) ・休憩 ・スクエアボッチャ (3試合目) ・スクエアボッチャ (4試合目)
備考	競技への興味があり、積極的に参加していた。競技進行を優先したため盛り上がりに欠ける場面があった。ルールを理解して投げる参加者が少ないように感じた。☒



北九州市モデルプログラム
(門司区) @ 門司体育館



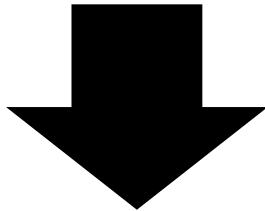
北九州市モデルプログラム
(門司区) @ スマイル門司

(3) 北九州市モデルプログラムまとめ

モデルプログラムの目的と成果は以下の通りである。

目的①

サテライト施設を会場に地域のその他社会資源の利用者に巡回スポーツ教室に参加してもらう。



成果①

小倉南区では、サテライト施設である城野体育館を会場に、地域のその他社会資源であるフラワー木町、障害福祉サービス事業所リーシュ、ファインズ ムービングの3施設の利用者が巡回スポーツ教室に参加した。

八幡東区では、サテライト施設である八幡東体育館を会場に、地域のその他社会資源である多機能型事業所ワンステップ、アベック戸畠の2施設の利用者が巡回スポーツ教室に参加した。

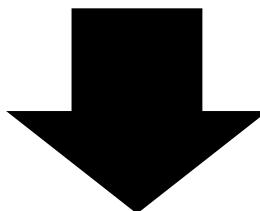
門司区では、サテライト施設である門司体育館を会場に、地域のその他社会資源であるスマイル門司の利用者が巡回スポーツ教室に参加した。

目的②

アレアスが仲介役となり、SKETと地域の当事者がつながる機会を提供する。

目的③

SKETがハブ施設、サテライト施設、地域のその他社会資源の施設をつなぐ潤滑油となり、地域のその他社会資源の施設においてSKET主導の指導につなげる。



成果②③

従来、アレアスの専門職が担っていた巡回スポーツ教室の主指導を、SKETスタッフに変更した。主指導者の変更により、これまで専門職が行っていたプログラム実施前の事業所への事前訪問や事業所職員との意見交換をSKETスタッフが年間を通して主導したことにより、各行政区においてSKETスタッフの存在と役割を認識してもらった。SKETスタッフとプログラム参加者が複数回のプログラムを通じて一緒に時間を過ごしたことで安心感が生まれた。各事業所・SKET・アレアスと信頼関係が構築されたことで次年度以降の活動を滞りなく行える土壌ができた。

(4) 北九州市モデルプログラム座談会まとめ

北九州市モデルプログラム関係者による座談会を開催した。北九州市障害者スポーツボランティアの会 SKET スタッフ、および北九州市障害者スポーツセンター・アレアスの専門職に、それぞれ2024年度に実施したモデルプログラムを振り返ってもらった。

(北九州市障害者スポーツボランティアの会 SKET)

- ・ 小野真子(主指導者)
- ・ 松浦道子(〃)
- ・ 矢野敏弘(〃)
- ・ 田中龍二(指導補助)
- ・ 柚原ゆかり(〃)

(専門職)

- ・ 有延忠剛(北九州市障害者スポーツセンター・アレアス)
- ・ 山下悟(〃)
- ・ 都留有香(〃)
- ・ 池永いずみ(〃)
- ・ 宮崎賢人(〃)
- ・ 古園美久(〃)
- ・ 近藤久子(〃)
- ・ 中溝友里亜(〃)
- ・ 間所章治(〃)
- ・ 亀井琉以奈(〃)

(ファシリテーター／事務局)

- ・ 小淵和也(笹川スポーツ財団)

●小倉南区

(SKET)

- ・ SKET スタッフが主指導になるのは新しい試みである。
- ・ これまでアレアス専門職が巡回スポーツ教室の主指導だったので、その時の指導内容を参考にして臨んだ。
- ・ 開始前にタイムスケジュールを作るが、参加者の状況やその日の雰囲気などにより、予定通りにはいかないことが多い。臨機応変に対応しているが、良いのか悪いのか不安はある。
- ・ これまで自分が担当したグループだけをみていれば良かったが、主指導者になると全体をみなければならない。複数グループが同時に動くので、全体の動きに気を付けた。
- ・ 身体を動かすことを楽しんでもらいたい。今日も楽しむ気持ちで参加している。
- ・ SKET スタッフとして長年一緒にやっているので、その日のサポート体制をみて、自分の役割を認識して動くようにしている。主指導者の指示を聞きつつ、指導補助としてどう動くべきかを観察しながら動いている。

(専門職)

- ・ 臨機応変に対応するスキルは非常に重要。その場の雰囲気にあわせて対応したのは良かった。支援学校、支援学級での勤務経験が生きていると感じた。
- ・ これまで自分が主指導をやっていたので、今回のモデルプログラムで指導補助として参加する場合も、どうすれば主指導者がスムーズに進行できるのかを予測しながら参加できた。
- ・ SKET の主指導者は、過去の教員経験をもとに指導を行っており、今回指導補助として入れるのを楽しみにしていた。実際に非常にスムーズな進め方で、参加者とのコミュニケーションひとつとっても、本当に勉強になる時間だった。
- ・ 参加者の動きもみながら、主指導者の動きも観察していた。自分が別の教室の主指導をやる際の参考にしたいと思った。
- ・ モデルプログラムでは、指導者全員でフィードバックの機会を設けて、お互いの振り返りをする時間があった。振り返る時間を設けてもらったことで、その日の学びが深くなかった。

●八幡東区

(SKET)

- ・ 北九州市の障害者スポーツ教室にかかわって15年。指導補助として、これまで楽しく参加してきた。主指導ははじめての経験。人前で指導するのは苦手。
- ・ 初回は人見知りもあってか、参加者が少しパニックになるシーンがあった。どうかかわってあげるのが良いかを考えながら接していた。最終回で参加者の様子が初回とはまったく変わっていたのはうれしかった。
- ・ 主指導者の声掛けが心地よく、参加者は、あの声掛けで落ち着けたのだと思う。
- ・ サポートスタッフ同士でも情報共有を行い、主指導者がスムーズに進められるよう意識した。

(専門職)

- ・ 第1回は参加者がパニックになり、どうなるか心配であったが、回を重ねるなかで落ち着き、顔見知りの指導者が増えてきたことで、落ち着いてきたように思う。信頼関係が構築されたと思う。継続していく重要性を再認識できた。
- ・ 参加者がひとりでポツンとしている時には、すぐに駆けよって声掛けしたり、グループ分けも、その日の参加者の関係性をみて分けていた。
- ・ 参加する事業所の特徴やその日の参加者の雰囲気などで教室の雰囲気は大きく変わる。都度、その確認をしながら、対応していたのは素晴らしい。
- ・ 今日は主指導ではなく指導補助としての役割だったので、同行する事業所職員とコミュニケーションを取り、参加者の当日の体調などの情報収集につとめた。
- ・ ふうせんバレー用に事前にポールを立てネットを貼って会場準備を行った。ただ、当日の参加者の様子をみて、対戦形式は難しそうとすぐに判断して、円陣を組んでボールを落とさないゲームに変更したのは素晴らしい。事前に準備したものを使いがちだが、経験則から瞬時に変更したのは良かった。
- ・ 主指導を経験することで、これまでとは別の視点で教室をみることができるとと思う。研修ではない実践現場での経験は貴重である。
- ・ 参加者がパニックになった時も笑顔を絶やさずに対応していた。参加者への愛情の深さを感じた。
- ・ 個別指導ではなくグループ指導なので、チームでの対応が重要である。臨機応変にチームワークが発揮されていたのを見ることが出来て良かった。さらに質を上げていけるように感じた。

●門司区

(SKET)

- ・ 北九州市の障害者スポーツ教室にかかわって約 25 年。これまで指導補助としてプログラムにかかわっていたが、今回は主指導者で責任感がまったく違った。
- ・ 参加者に楽しんでもらうこと、喜んでもらうことを一番に考えた。プログラムのタイムマネジメントも気とした。主指導、指導補助、どちらの立場も理解したので、今後の教室運営支援の心構えも変わる。
- ・ 参加者の態度、目、顔をみながら楽しんでいるかどうかを判断した。
- ・ フライングディスクは、どうしてもひとりで投げている時間が多いで、あまり盛り上がらなかった。ボッチャや卓球バレーは対戦形式にできたので盛り上がった。
- ・ 参加する事業所の状況や参加者の障害特性にもよるが、今回は、卓球バレーやスクエアボッチャなど、参加者が一緒に参加できる競技を楽しんでいた。
- ・ 事業所で行う日常活動とは別の顔をみせていると事業所職員から聞いた。そういう一面をみせてくれたのはうれしい。実施した甲斐があった。これが巡回スポーツ教室の良さ。
- ・ 門司区の参加者は競技を真剣にやりたい人が多かった。真剣にやっていたから、盛り上がっていないようにみえたが、ボッチャやフライングディスクは、本気で大会に出ようと思って、参加していると思う。ディスクを遠くに飛ばす参加者に「全スポ(全国障害者スポーツ大会)に出場できるかもよ」と声を掛けたら非常に喜んでいた。やはり、真剣に取り組んでいたのだと思う。

(専門職)

- ・ 役割分担を意識した。競技を真剣にやりたい参加者だったので、審判の役割に徹した。
- ・ 卓球バレーは事業所職員の人も気に入ったようで、後日、道具を借りにきて、事業所でやっていた。良いきっかけになったと思う。
- ・ 事業所職員いわく、事業所の日中活動ではあそこまで喜びをみせない参加者が、プログラム参加時には喜びをみせていた。別の顔があることを認識したと驚いていた。
- ・ 主指導者との意思疎通はもっとするべきだったと反省している。主指導者の意図を十分に理解できていなかったかもしれない。

●全体を通して

(専門職)

- SKET スタッフは経験が豊富なので任せすぎたところはあったかもしれない。もう少しコミュニケーションを取れれば、もっと良い教室になっていた可能性があり、反省点である。
- プログラムの本来の目的は、「非日常を体験する」である。もし、このプログラムに参加していなければ、事業所で日中作業をやっていた時間。その時間を使って教室を行うわけなので、気分転換になったり、リフレッシュできたり、健康増進につながったり、さまざまな目的が存在する。楽しむのは当然大切だが、非日常を体験することやマンネリ化しないことが重要である。
- 門司区では競技性を重視したプログラムになったが、これも非日常の視点では問題ないと考えている。だからこそ、参加者は日頃みせない別の一面をみせた。
- SKET スタッフに主指導をお願いしたことでみえてきた景色、アレアス専門職が指導補助として入ったことでみえた景色が、それぞれあると思う。これまでと異なる立場でかかわることで、それぞれが指導の幅が広がったと思う。



北九州市モデルプログラム座談会

IV. 本研究のまとめと考察

(1) 重度障害者の特徴とスポーツ実施における留意点

スポーツ庁「重度障害者に関する調査」では、重度障害者の身体的・精神的特徴と運動・スポーツ等を実施する際の障壁との関係を下記 5 点にまとめている。

- ① 関節可動域や筋力など筋骨格系の制約が大きく、運動やスポーツの実施に必要な姿勢を保持することや動作そのものを遂行することが難しい
- ② 関節や筋肉、呼吸や心臓、摂食や排泄、自律神経などのさまざまな身体機能に複数の障害があることが多く、運動やスポーツなどの負荷や刺激によって、これらの機能が悪化する潜在的なリスクがある。進行性神経筋疾患者の場合、突発的に脱力や疲労感、不随意運動、こわばり、けいれんなどが生じることがあり、継続が難しいこともある。
- ③ 覚醒や注意、認知やコミュニケーションなどの精神機能に障害があつたり、視覚障害により周囲がみにくいため、運動やスポーツのルールや内容を理解したり、正しく道具や機器を操作したり、介助者や仲間、相手とのコミュニケーションを取ることが困難である。
- ④ 大脳性視覚障害などの視覚障害や聴覚障害を合併しているケースもあり、かつコミュニケーションが難しい場合、どのような感覚や刺激の提示方法であれば、情報を受け取り理解ができるのか、評価・判断するのが難しいことがある。
- ⑤ 感情や行動のコントロールが難しい場合があり、運動やスポーツによって、イライラや興奮、不安などの情動の変化が大きくなったり、こだわりや欲求が強く表れたりすることがある。情動面の変化が筋肉の緊張と連動して動作が遂行できなくなる。進行性神経筋疾患者の場合、疾患の進行により日常生活でできないことが増え、落ち込みや自信喪失を感じることもある。やがて運動やスポーツに対する意欲やモチベーションが低下する。

その上で重度障害者が運動・スポーツ等を実施する場合の留意点を 4 つ示している。

- ① 座位保持装置やポジショニング、シーティングによって安定した姿勢を保てるよう調整したり、遂行が不可能な動作については支援者が介助したり、ルールそのものを調整するなど、身体の状態にあわせて対応する。
- ② 機能障害が連鎖すると急激に全身状態が悪化するリスクがあるため、負荷や刺激は慎重に与える。
- ③ 支援者は重度障害者が「どの程度理解しているのか」を十分に判断することが難しい場合、表情やコミュニケーション、介助者への確認等を通じて、理解度や喜怒哀楽の状態を確認しながら運動・スポーツ等の機会を提供する。
- ④ 症状の変化、情動面の変化を捉えた適切な声掛け、運動スポーツ等に取り組む意欲を高めることができるような声掛けを状況に応じて行う。

これらの留意点は、東京都障害者スポーツ協会の専門職が、江戸川区総合体育館スタッフと一緒に指導を行うなかで、プログラムや事前シミュレーションを通じて一貫して伝えてきた内容とおおむね違いはなく、改めて、本プログラムにおける指導ノウハウの継承が適切に実施できたことを裏付けた。

(2) 江戸川区モデルプログラムで明らかになったこと

本プログラムでは、これまで最重度障害者や重度障害者の受入経験のない公共スポーツ施設である江戸川区総合体育館において、プールプログラムとスタジオプログラムを実施した。プログラムを通じて明らかになったことは以下の通りである。

なお、本稿における最重度障害者は、「日常生活において全面的な介護が必要な障害者」であり、たとえば、重度の知的障害と肢体不自由の重複障害者、意思の伝達が困難な重度障害者などを想定している。

1) プールプログラム

重度障害者のサテライト施設での受入は可能だったが、最重度障害者の受入はハード面の整備も必要となるため現時点では難しかった。特に最重度の障害では、個人の障害特性を長年見てきた関係者でないと対応が難しく、医療職やリハビリテーション職の人たちでも、すべての懸念点に対しての対応策を提示することはできなかった。

2) スタジオプログラム

障害の程度が最重度、重度にかかわらず、公共スポーツ施設の体育館、地域の公民館などでは受入可能だった。ただし、最重度障害者の場合、受入側の綿密な準備、フォローなど、個人の障害特性を長年見てきた関係者（保護者、看護師）が同伴の上で懸念点の共有が必要であった。

3) 多様な人材と行政の役割

専門職が常駐していないサテライト施設、地域のその他社会資源では、複数の役割を持った人が集まり分担して専門職の役割を担った。江戸川区では、行政をはじめ、保護者、理学療法士、スポーツ指導者、施設スタッフ、パラスポーツボランティアなどがかかわり、都度、情報共有、意見交換を行いながら進めた。その際、行政が率先して、他団体・組織、施設との調整を行った。行政が中心的役割を担いながら、多様な役割を持った地域の人材ネットワークを活用していくのが非常に重要なことが確認できた。

4) ハブ施設とサテライト施設の役割分担

本プログラムを通じて、現時点ですべての障害者を受け入れられるわけではないことが分かった。一方、受入可能な障害者の対象範囲は、スキルや経験などを向上する機会を設け、時間をかけて人材を育成することで広がることも示唆された。障害者の受入基準をハブ施設、サテライト施設で共有しておくことで施設ネットワークの地域移行が最大限の効果を発揮すると考えられる。

各施設間で地域移行のイメージが共有できると、ハブ施設ではそれを見越した指導、機会の提供が可能となり、サテライト施設では、さまざまなシミュレーションを行った上での受入が可能となるため、地域に定着する可能性が高まる。

(3) 北九州市モデルプログラムで明らかになったこと

1) ボランティアの高齢化

SKET 会員の高齢化が進んでおり、地域のキーパーソンとして、数年先を見越した場合、現会員が引き続き活躍していくのには限界がある。一方で、SKET 会員が長年培ったノウハウ、知識、経験は非常に貴重である。

2) 多様な交流機会と相互支援

SKET の若い会員が活動する機会を増やすためにも、比較的参加が可能な週末開催のプログラムでの活動機会を増やしていくことが重要である。さらに、専門職と SKET の交流、SKET 間での世代を超えた交流、同世代の交流、他県の関係者との交流など、多様な交流機会を増やしていくことで、数年先の障害者スポーツの推進体制をイメージした相互支援につながる。すぐに解決できるわけではないので、時間をかけて、さまざまな可能性を模索する必要がある。

(4) 連携プロセスの検証

吉池らによると、「連携」とは、「共有化された目的を持つ複数の人、および機関（非専門職を含む）が、単独では解決できない課題に対して、主体的に協力関係を構築し、目的達成に向けて取り組む相互関係の過程」としている。さらに以下の7つのプロセスを連携の展開過程としている。

- ①単独解決できない課題の確認
- ②課題を共有しあえる他者の確認
- ③協力の打診
- ④目的の確認と目的の一致
- ⑤役割と責任の確認
- ⑥情報の共有
- ⑦連続的な協力関係の展開

江戸川区モデルプログラムにおけるプールプログラムの多職種連携状況を前述の7つのプロセスをもとに検証した。連携する団体・組織は、江戸川区文化共育部スポーツ振興課（行政）、鹿本学園PTA、江戸川区総合体育館、東京都障害者スポーツセンター（専門職）、笹川スポーツ財団（事務局）である。

①単独解決できない課題の確認

- ・ 鹿本学園PTAにヒアリングを実施し、重度障害児へのスポーツ環境が十分でないことを確認した（2023年度）。
- ・ 江戸川区総合体育館で重度障害児の受入経験がないこと、受入ノウハウを持った施設スタッフがいないことを確認した（2023年度）。

②課題を共有しあえる他者の確認

- ・ 行政と鹿本学園PTA、および江戸川区総合体育館プールの実態を共有した（2023年度）。

③協力の打診

- ・ 専門職に江戸川区における重度障害者受入環境の協力を依頼した（2023年度）。
- ・ 行政、鹿本学園PTA、江戸川区総合体育館、専門職にモデルプログラムの参加、および施設ネットワーク検討会議への参加を依頼した（2023年度）。

④目的の確認と目的の一致

- ・ 施設ネットワーク検討会議への参加を通じて、江戸川区内の実態の共有、モデルプログラムの目的の共有を図った（2023年度）。
- ・ モデルプログラム実施中の江戸川区総合体育館スタッフに対して、目的の再確認を行った（2024年度）。

⑤役割と責任の確認

- ・ 施設ネットワーク検討会議への参加を通じて、行政、鹿本学園PTA、江戸川区総合体育館、専門職、事務局の役割と責任を明らかにした（2023年度）。
- ・ モデルプログラム実施中の江戸川区総合体育館スタッフ、専門職に対して役割と責任の確認を行った（2024年度）。

⑥情報の共有

- 施設ネットワーク検討会議、および事前、事後の個別打合せなど、行政、鹿本学園 PTA、江戸川区総合体育館、専門職、事務局間で都度、情報を共有した(2023年度)。
- モデルプログラム実施中、プログラム実施日、および事前、事後の個別打合せなど、行政、鹿本学園 PTA、江戸川区総合体育館、専門職、事務局間で都度、情報の共有、プログラムのフィードバックを行った(2024年度)。

⑦連続的な協力関係の展開

- 施設ネットワーク、およびモデルプログラムの実施を経て、相互の関係性の構築、役割の検証を行った(2023年度、2024年度)。
- モデルプログラムをきっかけに、今後、江戸川区総合体育館で実施されるプログラムにおいて、引き続き確認を行っていく(2025年度以降)。

2023年度に施設ネットワーク検討会議を設置して連携する団体・組織との議論を行い、会議をもとに作成したモデルプログラムを2024年度に実施した。「①単独解決できない課題の確認」「②課題を共有しあえる他者の確認」「③協力の打診」を2023年度に行い、「④目的の確認と目的の一一致」「⑤役割と責任の確認」「⑥情報の共有」は2年間、都度実施してきた。連携する団体・組織が多くなると、目的や役割・責任に対する認識が一致しない可能性があったため、「⑥情報の共有」を都度行いながら、「④目的の確認と目的の一一致」「⑤役割と責任の確認」は複数回の実施の必要性が明らかになった。「⑦連続的な協力関係の展開」は、2025年度以降の継続事業の状況をみつつ、連携している団体・組織の意見交換を活発にするなかで、プログラム内容の維持につとめたい。

(5) 信頼関係の構築

森田は「顔の見える関係」には、「1. 名前と顔が分かる」「2. 考え方や価値観・人となりが分かる」「3. 信頼感をもって一緒に仕事ができる」の3つの内容が含まれるとしている。その上で、地域連携において「顔の見える関係」があることは良いことと指摘する。構成要素には以下6要素があげられた。

- ①顔が分かるから安心して連絡しやすい
- ②役割を果たせるキーパーソンが分かる
- ③相手にあわせて自分の対応を変える
- ④同じことを繰り返して信頼を得ることで効率が良くなる
- ⑤親近感がわく
- ⑥責任のある対応をする

「顔の見える関係」の促進は地域で話す機会が影響している。具体的には、グループワーク、日常的な会話、患者と一緒にみることを通じて、性格、長所と短所、仕事のやり方、理念、人となりが分かるようになり、信頼関係が構築される。

本研究における専門職と江戸川区総合体育館の施設スタッフの関係性が、モデルプログラム開始前の「1. 名前と顔が分かる」状態から、第1フェーズを経て「2. 考え方や価値観・人となりが分かる」関係になり、第2フェーズで「3. 信頼感をもって一緒に仕事ができる」関係になった。こうした結果からも、フェーズを分け、複数回にわたって共同でプログラムを実施してきた意義は大いにあったと考える。

施設ネットワークを構築していくにあたっては、連携のプロセス、「顔の見える関係」を、段階を経て構築していくためにも、期間と回数は非常に重要な要素であった。

(6) 施設ネットワーク化の全国展開に向けたサテライト施設の役割分担

笹川スポーツ財団では、2010年以來、障害者が身近な地域でスポーツに親しめる社会の実現のためには、障害者スポーツの専門性の高い施設とそのほかの施設とのネットワーク化・連携を促進する必要があると提言してきた。ここでは、スポーツ施設を以下の3つに分類した。

1) ハブ施設：

都道府県単位で障害者スポーツの拠点（ハブ）として機能する障害者スポーツセンター

- ① 障害者のスポーツの場のコーディネートや質の高い指導ができる人材がいる障害者専用・優先スポーツ施設

⇒日本パラスポーツ協会「パラスポーツセンター協議会」加盟施設（29施設／2024年度時点）

2) サテライト施設：

都道府県・市町村単位で障害者の日常的なスポーツ活動の場となる施設

- ② ①を除く障害者専用・優先スポーツ施設
- ③ ①と②を除く公共スポーツ施設

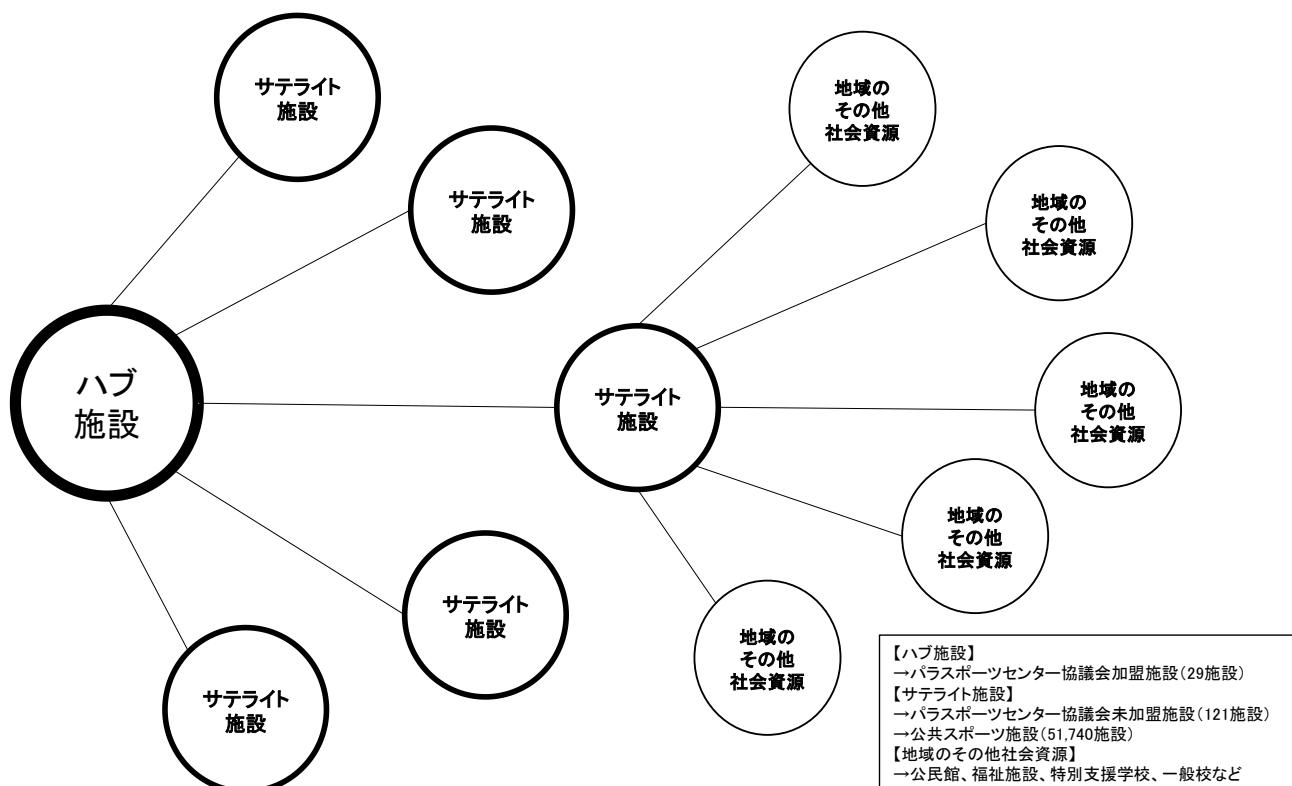
3) 地域のその他社会資源：

ハブ・サテライト施設以外で、障害者のスポーツの場となる施設

- ④ 公民館、福祉施設、特別支援学校・一般校

その上で、それぞれの施設の役割とともに、ハブ施設とサテライト施設、サテライト施設とその他社会資源とのネットワーク化のイメージを示した（図表5-1-1）。

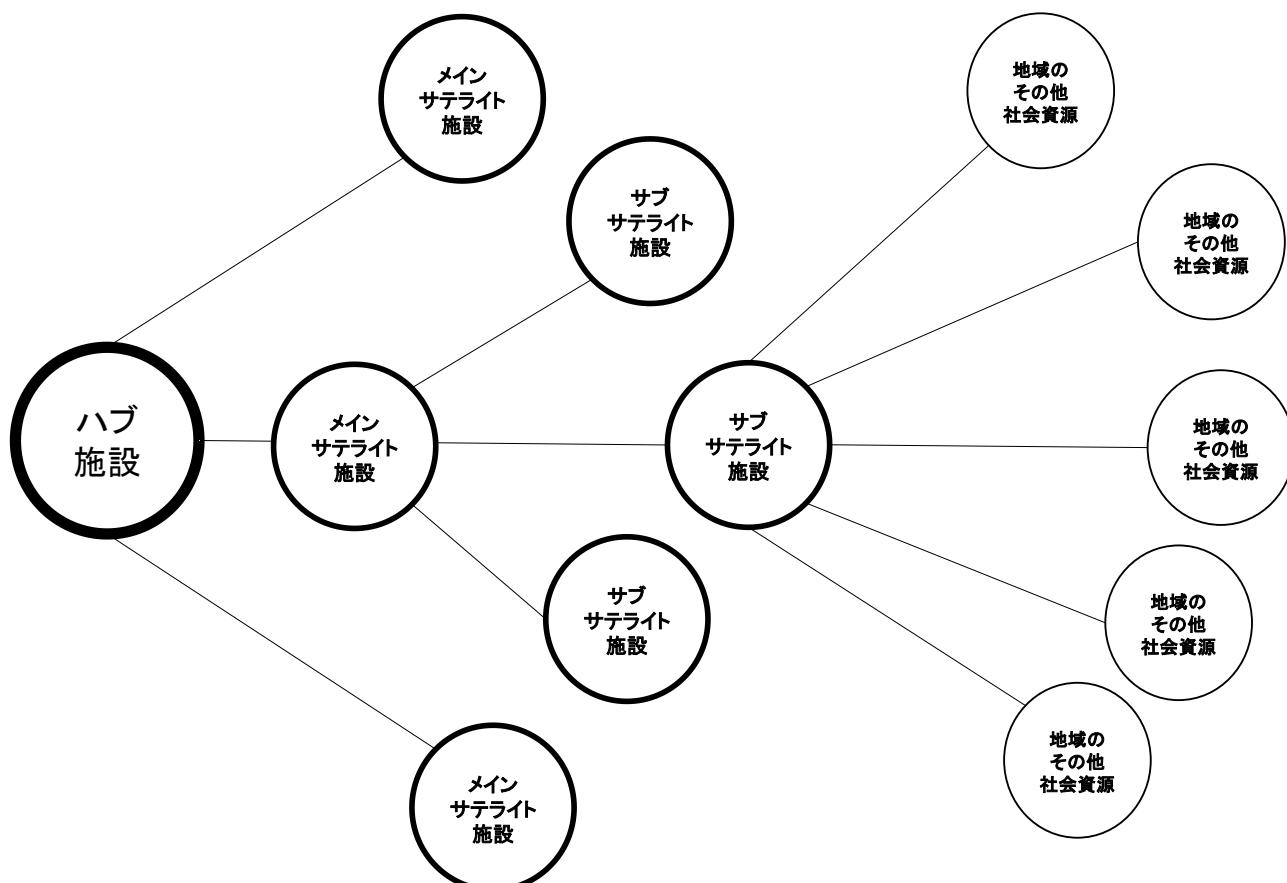
図表5-1-1 施設ネットワーク図（～2023年度）



本研究では、東京都江戸川区、および福岡県北九州市において 2024 年度に実施した施設ネットワーク化の実践研究の結果をまとめた。ハブ施設、サテライト施設、地域のその他社会資源のそれぞれの施設の機能や役割、施設ネットワークを実現していくにあたって欠かすことのできない人材（障害者スポーツ指導の専門職、障害者スポーツのボランティア）の確保・育成・活用について検証し、ハブ施設からサテライト施設へのノウハウ継承や利用者の地域移行（トランジション）の具現化に取り組んだ。

モデルプログラムを参考に全国展開を進めていくにあたっては、施設ネットワーク化のさらなる進展が必要となる。スポーツ庁「体育・スポーツ施設現況調査」（2021）によれば、全国には 51,740 の公共スポーツ施設がある。施設ネットワーク化に向けて、すべての公共スポーツ施設をサテライト施設化するとした場合、全国に 29 施設（2024 年度時点）ある障害者スポーツセンターだけでノウハウ継承や利用者の地域移行（トランジション）を進めていくには多くの時間を要する。全国展開をより一層進めるために、サテライト施設のなかでノウハウ継承を補完できる中心的なサテライト施設が必要と考える。具体的には、サテライト施設のなかで、よりハブ施設の機能を備えた施設を「メインサテライト施設」、これからサテライト施設として整備を進めていく施設を「サブサテライト施設」とする（図表 5-1-2）。その上でサテライト施設間での関係を強固にしていき、地域において各サテライト施設の特徴を補完することができれば、中長期的には、施設ネットワーク化が進むと期待する。東京都江戸川区のモデルプログラムを通して、サテライト施設であった江戸川区総合体育館は、メインサテライト施設としての機能は備えており、十分にその役割を担えると考える。

図表 5-1-2 施設ネットワーク図（2024 年度版）



(7) インフォーマルサポートのフォーマル化

社会資源には、フォーマルサポートとインフォーマルサポートがあり、これらを生活のニーズにあわせて実用的に取り入れて調整していく必要になる。奥田は、フォーマルサポートとインフォーマルサポートについて以下のように分類している。

- ・ フォーマルサポート(民生児童委員、特定非営利活動法人(NPO)、社会福祉協議会、地域包括支援センター、市役所、福祉施設、病院等の制度化された集団によるサポート)
- ・ インフォーマルサポート(家族、親族、友人、近隣によるサポート)

フォーマルサポートは、行政が提供するサポート、自治体による福祉施策、医療、介護保険サービス、医療法人や社会福祉法人、NPO が提供するサポートなど公的なサポートである。一方、インフォーマルサポートは、家族や近隣住民、ボランティア、地域の団体・組織などが供給し、安定的・専門的な供給を前提としているサポートである。

施設ネットワークの場合、ハブ施設やサテライト施設が提供する障害者スポーツ事業や専門職が提供する出張教室(出前教室)などがフォーマルサポート、北九州市の障害者スポーツボランティア団体(SKET)や江戸川区のパラスポーツアンバサダーなどのボランティアが支援する活動がインフォーマルサポートである。北九州市モデルプログラムは、障害者スポーツ教室の主指導者をフォーマルサポートである北九州市障害者スポーツセンター・アレアスの専門職から、インフォーマルサポートであるSKETに移行しようとする画期的な取り組みであった。安定的・専門的サービス提供を満たすため、専門職の同行は必須であったが、全国的な専門職不足の課題の解決策のひとつとして、今後も検証していく必要がある。

さらに、インフォーマルサポートを計画通りに供給できるようにするために、地域のコーディネーター一人材がつなぎ役として調整機能を果たすのが理想である。当財団が 2018 年度～2020 年度に大分県で実践検証を行った「SSF 地域スポーツイノベーター」を皮切りに、現在は、日本パラスポーツ協会が「JPSA コーディネーター事業」として、宮城県、広島県で実践研究を進めている。地域のさまざまな事情に対応した人材の検証が進むことで、フォーマルサポート、インフォーマルサポートのいずれかを含めた社会資源の活用が進むことを期待される。その際には、目的や目標を明確化し、サービス担当者や当事者などの会議を通じて、それぞれが役割分担をして、取り組んでいくことが重要である。障害当事者のスポーツ環境を考え、当事者のニーズにあわせて、組織や人の役割を明確にし、良い関係性のなかでかかわり合いを持ち、フォーマルサポート、インフォーマルサポートなどの社会資源を最大限に活用して環境整備につとめていくのが理想である。

V. 実施体制

東京都における障害者スポーツ施設運営に関する研究は、以下の関係者と笹川スポーツ財団の共同研究により実施した。(所属は 2024 年度調査時)

江戸川区文化共育部スポーツ振興課

〃
〃

江戸川区総合体育館

〃
〃
〃
〃
〃
〃
〃
〃
〃
〃

東京都立鹿本学園 PTA

〃

東京都障害者スポーツ協会スポーツ振興部事業推進課

東京都障害者スポーツ協会スポーツ振興部地域スポーツ振興課

東京都障害者総合スポーツセンタースポーツ支援課

笹川スポーツ財団スポーツ政策研究所

笈川晋一
萩原正明
田中知子
山田 勝之
原満梨絵
富永美千代
關川智絵
阿部あゆみ
生井一公
村上久留美
柳田千津子
木原栄美
二ノ宮美津希
山田靖子
山口美佳
佐々木ゆみ
屋敷可奈恵
矢壁彩
小淵和也

北九州市における障害者スポーツ施設に関する研究は、以下の関係者と笹川スポーツ財団の共同研究により実施した。(所属は 2024 年度調査時)

北九州市障害者スポーツセンター

〃
〃
〃
〃
〃
〃
〃
〃
〃
〃
〃
〃
〃
〃
〃
〃
〃

有延忠剛
山下悟
都留有香
池永いずみ
宮崎賢人
藤本有紀
古園美久
山下順子
近藤久子
中溝友里亜
間所章治
亀井琉以奈
小野真子
松浦道子
矢野敏弘
田中龍二
柏原ゆかり
戸田たまえ
中村記子
小淵和也

北九州市障害者スポーツボランティアの会 (SKET)

〃
〃
〃
〃
〃
〃
〃

笹川スポーツ財団スポーツ政策研究所

参考文献

- ・ 奥田憲昭(2009). 認知症のインフォーマルサポートネットワークに関する地域間比較研究. 大分大学大学院福祉社会科学研究科紀要 12.
- ・ 笹川スポーツ財団(2022). 障害者専用・優先スポーツ施設に関する研究 2021.
- ・ 笹川スポーツ財団(2023). 東京都における障害者スポーツ施設運営に関する研究.
- ・ 笹川スポーツ財団(2024). 地域における障害者スポーツ施設運営に関する研究.
- ・ 笹川スポーツ財団(2023). スポーツ白書 2023～次世代のスポーツ政策～.
- ・ スポーツ庁(2024). 令和 5 年度 障害児・者のスポーツライフに関する調査研究.
- ・ スポーツ庁(2024). 令和 5 年度実態把握が十分でない障害種の方のスポーツ実施に関する現状把握調査 重度障害者に関する調査.
- ・ 東京都生活文化スポーツ局 東京都障害者スポーツ協会(2023). 障害者のスポーツ施設利用促進マニュアル.
- ・ 東京都障害者スポーツ協会(2023). <https://tsad-portal.com/>
- ・ 日本パラスポーツ協会(2022). <https://www.parasports.or.jp/>
- ・ 日本パラスポーツ協会(2023). 令和 4 年度国庫補助事業 公認障がい者スポーツ指導員実態調査報告書.
- ・ 森田達也(2012). 地域緩和ケアにおける「顔の見える関係」とは何か?. *Palliative Care Research* 7(1).
- ・ 吉池毅志, 栄セツコ(2009). 保健医療福祉領域における「連携」の基本的概念整理--精神保健福祉領域における「連携」に着目して--. 桃山学院大学総合研究所紀要 34 卷 3 号.

地域の障害者スポーツ振興における施設ネットワーク実践研究 報告書

2025年3月発行

発行者 公益財団法人 笹川スポーツ財団

〒107-0052 東京都港区赤坂 1-2-2 日本財団ビル 3F
TEL 03-6229-5300 FAX 03-6229-5340
E-mail info@ssf.or.jp URL <http://www.ssf.or.jp/>

無断転載、複製および転訳載を禁止します。引用の際は本書が出典であることを明記してください。
本事業は、ボートレースの交付金による日本財団の助成金を受けて実施しました。

